

津阪東陽『杜律詳解』 訳注稿 (十二)

二宮俊博

本稿には、津阪東陽『杜律詳解』巻中の「愁」から「夜」詩までを収める。原文の「ノ」は「シテ」に、「」は「コト」に、「厶」は「トモ」にそれぞれ改めた。明らかに訓点脱落していると思われる箇所には、これを補った。また詩句の左傍にところどころ附されている和訓は、※をつけて改行して示した。書き下し文は、紙幅の都合で省略する。なお、詩題の上には便宜的に通し番号を施した。

- 083 愁
- 084 遣悶戲呈路十九曹長
- 085 峽中覽物
- 086 暮春
- 087 示獐奴阿段
- 088 七月一日題終明府水樓
- 089 黃草
- 090 白帝
- 091 吹笛
- 092 夜

083 愁

公在夔^ニ感^シ春^ニ、歸思累^ニ動^ク。因有^ニ此作^一。公自註^ニ強戲^ニ爲^ニ吳體^一。

(注1) 詳註(卷十八)に黄生『杜工部詩說』の「皮陸集中に亦た吳体詩有り。乃ち當時の俚俗、此の体を爲す耳。詩流之に效ふを屑しとせず。杜公の篇什、既に衆く、時に變調を出だす。凡て集中の拗体、皆此の体に属す。偶たま例を此に発す。戯と曰ふ者は、其の正律に非ざること明らかなり」というのを引く。皮陸は、晩唐の皮日休・陸龜蒙。

なお、吳体について論じたものに、郭紹虞「論吳体」(『照隅室古典文学論集』下冊所収。上海古籍出版社、一九八三年)、賃常彬「説吳体」(『杜甫研究學刊』一九八九年第四期)がある。

公は夔州にあつて春に感じ、故郷に帰りたいという思いがしきりに動いた。それでこの作がある。公の自注に「強ひて戯れに吳体爲す」と。

江草日日喚愁生^ス 巫峽冷冷非世情^ニ

※非世情…コ、ロナシ

楚辭^{注2}春草生兮萋萋^ヲ、王孫遊兮不歸^ヲ。感^シ春色之盛^{ナルニ}、恨^レ未^レ能^レ歸^{コト}也。今江上之草日^ニ長^{シテ}、而春色將^ニ爛漫^{ナルト}、

坐^ニ令^三人^ヲ感^{シテ}思^ハ故郷之春^ヲ、故^ニ曰^三草色喚^レ起^{スト}客愁^ヲ。以^ニ無情^ヲ爲^ス有情^ト、而恨^ス其撩^ス人^ヲ、亦不堪^レ愁^ニ之癡心也。冷冷^ハ水流^ル貌^ト。非^ニ世情^ニ言^フ其無情^ヲ。蓋^{シテ}吾切^ニ欲^ス東歸^ヲ、而未^レ可^レ得^ル。水^ハ則東流自由^ニ冷冷^ト去^テ而不^レ止^マ。漠然^ト與^レ人無^レ涉^{コト}。是何^ノ無情^{ナル}哉。戴叔倫^ハ詩^ニ沉湘日夜東流去、不爲^ニ愁人^一住^{マラ}少時^ヲ、亦此意也。巫^ニ作^レ春^ヲ。

(注2) 邵傳『集解』に挙げる。薛益『分類』(卷一、述懷)も同じ。淮南王劉安の「招隱士」(『楚辭』卷十二、『文選』卷三十三)の句で、もとは「王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋」(王孫遊びて帰らず、春草生じて萋萋たり)に作る。「集解」および「分類」に引くのは、誤例。

(注3) 薛益『分類』に『楚辭』の句を挙げた後、「今、江上の草日に長じて、公未だ帰る可からず。故に愁を喚んで生ずと云ふ」と。宇都宮遷庵の増広本にも引く。

(注4) 顧宸『註解』に「冷冷は水声なり」と。宇都宮遷庵の両著にも挙げる。

(注5) 邵傳『集解』に「非世情」の下に「無情」と注する。

(注6) 顧宸『註解』に挙げ、「註解」は宇都宮遷庵の増広本にも引く。中唐・戴叔倫の「湘南即事」詩(「三休詩」卷一/「全唐詩」卷二七四)に、

盧橘花開楓葉衰

盧橘花開いて楓葉衰ふ

出門何處望京師

門を出でて何れの処にか京師を望まん

沉湘日夜東流去

沉湘 日夜 東流し去り

不爲愁人住少時

愁人の為に少時を住まらず

とある。

(注7) 錢注(卷十六) および輯註(卷十六) に巫字の下に「一に春に作る」と。輯註は、宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

『楚辭』に「春草生じて萋萋たり、王孫遊びて帰らず」と。春色の盛んなるに心感じて、いまだ故郷に帰ることができないのを恨むのである。今、〈江〉のほとりの〈草〉は〈日〉ごとに成長して、春色はまさに爛漫と盛りを迎えようとしており、そぞろに人をして心感じて故郷の春を思わせる。それゆえ〈草〉色が客〈愁〉を〈喚〉び起すという。無情のものを情あるものとみなし、それが人に心かき

乱し落ち着かなくさせるのを恨む。やはり〈愁〉に堪えないことから、のたわけた心ばえである。〈冷冷〉は、水の流れるさま。〈世情に非ず〉は、その無情を言う。けだし自分は切に東に帰りたく思いながら、いまだ機会を得ることができずにいる。水はといえは東に流れ、好き勝手に〈冷冷〉として去つて止まず、何ら気にも留めず人と相渉ることがない。何と無情なることか。戴叔倫の詩に「沉湘日夜東流し去り、愁人の為に少時を住まらず」と。同じくこの意である。〈巫〉は、一に〈春〉に作る。

盤渦鷺浴^ス底^ニ心性^ヲ 獨樹花發^テ自分明

※盤渦：ウヅマクフチ 底：イカナル 自分明：オモシロゲニ

底何^ハ也。渦水旋^リ流^ル也。峽中水波圓折^{スル}者、名^ヲ曰^ニ盤渦^ト。此

峽流最險^{ナル}之處、不^レ宜^レ浴^ス鷺^ヲ。而^ル鷺乃攸然^ト若得^ニ其所^一者^上。公出峽^ヲ之志、欲^ハ翼^{シテ}而飛^ニ。彼則羽翰自在、何^レ天

不^レ可^レ飛、而不^ニ有^テ去^テ、是何^ノ心性^ヲ、自得^ニ乃爾^一。殊^ニ可^レ怪^ム耳。

與^ニ獨鶴^一不^レ知何事^ニ舞^一、同一感嘆。獨樹著^テ花燦爛、自與^ニ他木^一

分^レ色^ヲ、殊^ニ有^テ得意揚揚^ノ之態、亦使^ニ人^一不^レ忿^ム也。曰底曰自、

竝^ニ有^ニ在^ニ彼^一而不^レ關^レ我^ニ之意。蓋巫峽風土之惡、非^レ所^ニ宜^一

久^ク居、而公留^ニ滯^一于此、不堪^ニ鬱鬱^一之嘆、因^ニ愁^一之切^{ナル}、痴

情咎^レ物^ヲ也。

(注8) 邵傳『集解』に〈底〉の下に「何なり」と注する。俗語的表現。ちなみに、釈大典「詩語解」卷上、底、甚の条に「俱^ニ俚語、何也。指^{シテ}事^ヲ而言^フ、比^{シテ}何^ノ義狹^シ」といい、この「盤渦」の句を例の一つに挙げ

る。

(注9) 『文選』卷十二、晋の郭璞「江賦」に「盤渦谷のごとくに転り凌濤山の

ごとくに翻る」とあり、その李善注に「渦は水の旋り流るるなり」と。

(注10) 訳注稿(七)、046「野望」詩の第五句。

(注11) 釈大典「詩語解」卷下、不忿の条に「不忿、言^ハ不^レ勝^ハ忿^ニ也」と。

(注12) 下文の085「峽中物を覽る」詩に「形勝餘り有れども風土惡し」と。

〈底〉は、何である。〈渦〉は、水が旋り流れることである。峽中の

水波がぐるぐると渦巻くのを名づけて「盤渦」という。これは峽流の最も危険な場所、(鷺)を「浴」させるのにはふさわしくない。それなのに(鷺)はかえって悠然としてその居場所を得たもののようにある。公の(峽)を出たいという思いは、翼をつけて飛んでゆきたいほどであるが、そいつはといえば自在にはばたき、どこ空でも飛んでゆけなくないのに、立ち去ろうという気がない。どういう(心性)なのか、自ら満足することかえってかかる具合である。

実にけつたいなことだ。「独鶴知らず何事に舞ふ」と同一の感嘆。「独樹」が「花」をつけてきらびやかに咲き誇り、おのずから他の木とは色を分かち、ことさらに得意満面、意気揚揚の態があるのは、やはり人をして腹立たしい思いをさせるのである。(底ぞ)という「自ら」という、いずれも彼にあつて我に閑せずという意がある。けだし(巫峡)の風土の悪しきこと、久しく居るによるしきところではない。しかるに公はここにぐずぐずと留滞して、鬱鬱の嘆に堪えず、(愁)の切なるによって、痴情のあまり物を咎めるのである。

十年戎馬暗_レ南国_二 異域_一賓客老_レ孤城_二

前四句只言_二感_レ物_一増_レ愁_一、此乃言_二愁之實_一。暗_一者氣稜未_レ銷_一也。南国ハ謂_二楚蜀ノ地方_一。孤城ハ謂_二夔府_一。蓋自_二祿山之反_一至_レ今_一二十有二年。中原ハ小康、南方未_レ靖、戰塵動_一起_一。殺氣蔽_レ天_一、是以身阻_レ異域_一、不_レ能_レ回_レ鄉_一、流_レ寓_二孤城_一、悠悠送_レ老_一也。

(注13) 「南」字、錢注および輯註は「萬」に作り、輯註に「黃は南に作る」と

注する。黄は、黃鶴のこと。輯註は、宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

(注14) 邵傳『集解』に「前の四句は愁を言ひ、後の四句は愁の実を言ふ」。

(注15) 訳注稿(中)、077「諸將五首」其四の第二句に「冥冥たる氣稜未だ全く銷せず」とあり、詳解に「氣稜は妖氣なり」と。

前四句は、ただ景物に心感じて「愁を増すことを言う。ここでやつと(愁)の内実を言う。(暗)とは、「氣稜未だ全く銷せ」ざること

である。(南国)は、楚蜀地方のこと。(孤城)は、夔府のこと。けだし安祿山の反乱から今に至るまで十有二年、中原は小康状態だが、南方はいまだ靖まらず、戦塵が事あることにいつも起り、殺氣が天を蔽っている。かくて身は(異域)に阻まれて、故郷にもどることができず、(孤城)に流寓して、鬱鬱として(老)いの日々を過ごすのである。

渭水秦山得_レ見_一否_一 人今罷病_一席縦横_一

渭水ハ長安ノ名川。秦山ハ即終南山。人ハ公自謂_一。罷音皮、疲也。縦横ハ恣_レ勢_一馳驅_一也。人ト與_レ席、罷病ト與_レ縦横、反對_一用_レ之。此憶_二京師_一而言。長安、山川、故郷、勝槩、此生得_レ見_一。恐_レハ竟_一無_レ期。身既_二衰憊_一、賊方_二猖獗_一。戀_レ家_一憂_レ國、悲_レ可_レ支_一邪。公詩_二不_レ可_一久_一留_二豺虎_一亂_一、中原君臣豺虎邊_一、竝_二指_一寇盜_一。舊解以爲_レ比_一當時_二苛政_一、非也。凡言_二席狼_一、比_二其暴惡_一近_二之_一、則害_レ人_一宜_二畏避_一也。說苑_一譬_二猶豺狼_一、不_レ可_二以_一身_一近_一之也。言_二近_一則食_レ人_一也。

(注16) ちなみに、宇都宮遷庵の詳註に「人ハ民ヲ指テ云」と。なお、仇兆鰲の詳註(卷十八)は民の意とし、鈴木虎雄「杜少陵詩集」(卷十八)も「人民」と解する。

(注17) 邵傳『集解』に「罷」字の下に「音皮」と注する。

(注18) 112「反照」詩の第七句。東陽の詳解に「南方、寇盜の藪。暴惡豺虎の如し。人の居る所に非ず」と。(注20)も参照。

(注19) 108「昼夢」詩の第六句。東陽の詳解に「豺虎は寇盜擾乱を謂ふ」と。

(注20) も参照。

(注20) 邵傳『集解』に「苛政暴斂、虎よりも甚だし、集註(卷二十二、述懷類)に「虎縦横は暴斂を以て言ふ。所謂苛政は虎よりも猛なり」と。さらに顧宸「註解」にも明・張璠(字敬)「杜律訓解」の説を引いて「虎縦横とは暴斂を謂ふ」とし、具体的には第五琦の什一税法によって京兆の民がこれに苦しんだことを指すとする。詳註(卷十八)および鈴木虎雄「杜少陵詩集」(卷十八)も、同様の解釈。これに対して釈大典「杜律發揮」は「以_レ虎_一比_二苛政_一、非。不_レ可_一久_一留_二豺虎_一乱_一、中原君臣豺

虎ノ辺、皆謂「逆賊」也」という。なお、『註解』は宇都宮遷庵の増広本に「集註」は詳説に挙げる。「苛政は虎よりも猛なり」は、『礼記』檀弓下に見える。

(注21) 『説苑』尊貴篇に「今人、忠信重厚ならずして知能多き有り。此の如き人は、譬へば猶ほ豺狼のごときか、身を以て近づく可からざるなり」と。

《歟》字、《與》に作る。

《渭水》は、長安の名だたる川。《秦山》は、とりもなおさず終南山。《人》は、公自らの謂。《罷》、字音は皮、疲である。《縦横》は、勢いを恣にして馳驅するのである。《人》と《虎》と、《罷病》と《縦横》と、反対にしてこれを用いる。これは京師を憶つて言う。長安の山川や故郷の勝概を、これから生きている内に見られるのは、おそらくは結局あてがなくなかない。わが身は衰老困憊している上に、賊はまさに猖獗を極めており、家を恋い国を憂え、悲しみに身を支えきれない。公の詩に「久しく豺虎の乱に留まる可からず」とか「中原君臣豺虎の辺」というのは、いずれも寇盜を指す。旧解に当時の苛政だとするのは、よくない。すべて虎狼を言う場合は、その暴悪で近づく人を害し、畏避すべきであるのに比するのである。『説苑』に「譬えば猶ほ豺狼のごときか、身を以て近づく可からざるなり」と。近づけば人を食うことを言うのである。

084 遣悶^レ戲^二呈^三路十九曹長^一

※悶：モダヘ

路十九、名未^レ詳^{ナラ}。蓋公在^二掖省^一時、路亦爲^二補遺^一。故^二以^二曹長^一稱^レ之^ヲ。今在^二夔州^一、以^二舊僚^一友^{トシ}善^シ、詩酒同好、公數^レ過^レ觴詠^ス。此日亦因悶^二思^レ飲^ヲ、故^二有^二此寄^一也。徐子能^二云^一、公聞居無聊、欲^二到^二路家^一遣^二悶^一、雨餘泥濘、著^二甚^一要緊^ヲ、故^二先戲^二呈^一。藉^二以^一解^レ嘲^ヲ也。

(注1) 掖省は、宣政殿門の左右にある門下・中書の兩省。ここでは、門下省のこと。

(注2) 顧宸『註解』に「路も亦た補遺と爲つて、西省に在り、故に曹長と稱す」と。宇都宮遷庵の両著に挙げる。また『而庵説唐詩』(卷十八)に「路曾て補遺に官す、西省に在り。故に曹長を以て之を稱す」と。補遺は、右補闕・右拾遺。西省は、中書省。

但し、岑仲勉『唐人行第錄』は、晩唐の李肇『唐国史補』卷下に「尚書丞・郎・郎中、相呼びて曹長と爲す」というのを挙げ、仇注に「路拾遺と爲り、院は西省に在り、故に曹長と曰ふ」とするのを誤りだとし、拾遺は尚書省に属さず、杜甫が工部員外郎であることから言うとしている。

(注3) 『而庵説唐詩』に「此れ子美が雨中悶坐し、路十九の家に到りて悶を遣らんと欲す。長途泥濘、甚^ニ的要緊^一を着^レけん。故に先づ戯れに呈し、藉^二て以て嘲を解^一くなり」と。《甚》は俗語で、何の意。

《路十九》、名は未詳。けれど公が掖省にありし時、路も同じく補闕か拾遺の官であつたのだろう。それゆえ《曹長》の語でこれを称する。今、夔州にあつて、昔の同僚であることから友人で仲がよく、同じく詩酒を好み、公はしばしば訪れて酒を飲み詩を詠じた。この日も《悶》によつて飲まんと思ひ、さればこの寄する作があるのである。徐子能が云う、「公は閑居無聊の身で、路の家に到つて悶を遣らうとしたが、雨あがり道はぬかるんでいる。何の緊急の用があるうか、べつに慌てて行くような大事はない。それゆえ先づ戯れに呈した。口実にして弁解するのである」と。

江浦^ノ雷聲喧^二昨夜^一 春城^ノ雨色動^二微寒^一

昨夜春雷大^ニ鳴^一、而今朝天未^二即晴^一、餘寒復來^ル。峽中氣候之偏、暮春乃如此^ノ也。

(注4) 『而庵説唐詩』に「今朝城中、尚ほ雨色有り、春寒ければ則ち雨ふり、天未だ即晴せざるなり」と。今朝は、今日。訳注稿(十)、079「十二月一日 三首」其一の(注2)参照。

《昨夜》は春の《雷》が大いに鳴り、今日になつても空はまだすつきり晴れず、餘《寒》がぶりかえした。峽中の氣候が偏頗なること、暮春になつてさえこのようなありさまなのである。

黄鶯竝坐^(注5) 交^{シテ}愁^シ溼^フ 白鶯羣^リ飛^テ太^タ劇^フ乾^ク

※愁^シ溼^フ：ヌレルヲナンギガリ 劇^シ：ウレシガリ

坐^ハ止^セ也。古樂府ノ鳥生八九子^(注6)端坐^ス秦氏桂樹ノ間^ト。鶯坐本^レ此^ニ。公^ニ詩^ニ又云、蘆花畱^レ客^ニ晚、楓樹坐^レ深^ニ。又、巫山秋夜螢火飛、疎簾巧^ニ入^ニ坐^ニ人衣^ニ。劇^ニ猶^レ歡^ニ也。特^ニ用^ニ此字^ヲ、形^ニ喜色揚揚^{タル}之狀^ヲ。舊說^ニ訓^シ苦^ニ、訓^シ苦^ニ、竝^ニ未^ニ穩當^{ナラ}。夫^レ雨中鶯亦龍鍾、既^ニ天霽^ニ、喜^ニ毛羽^ノ之乾^ニ、翩翩^ト飛^ル、若^ク矜^リ誇^リ然^リ。極^テ言^ニ快晴^ノ之景^ヲ也。蓋夜雨連朝、久^{シテ}而始^ニ霽^ル。故^ニ兩鶯竝^ニ坐^ニ樹枝^ニ、愁^シ溼^フ而^レ不^レ鳴^ル飛^ル、羣鶯翺^ニ翔^ニ江浦^ニ、喜^シ晴^ヲ而^レ不^レ勝^ニ歡^ニ。閑坐^ノ之際、一憂^ニ一喜^ニ、如^ク黃鶯愁^レ溼^ヲ、只好坐^ニ在家裏^ニ。如^ク白鶯劇^フ乾^ク、又好^ニ走出^ニ門^ヲ去^ニ、所^ニ以^ニ欲^ニ訪^ニ友^ヲ、觸^{シテ}詠^{シテ}遣^ニ興^ヲ也。或^ハ謂^フ下半與^ニ上半^ニ不^レ接^セ、竟^ニ似^ニ兩截^ニ體^ニ。坐^ス不^レ詳^ニ此意^ヲ也。

(注5) 《鶯》字、錢注(卷十八)および輯注(集外詩)は《鶯》に作る。
(注6) 輯注(補注)に挙げる。『樂府詩集』卷二十八、相和歌辭三。『鳥生』ともいう。

(注7) 大曆元年(七六六)の作「峽口」二首其二(詳註卷十八)に、

時清關失險 時清ければ関 險を失し
世亂戟如林 世亂るれば戟 林の如し
去矣英雄事 去りぬ英雄の事
荒哉割據心 荒なるかな割據の心
蘆花留客晚 蘆花客を留めて晩れ
楓樹坐猿深 楓樹猿を坐せしめて深し
疲茶煩親故 疲茶親故を煩はす
諸侯數賜金 諸侯數にば金を賜ふ

(注8) 大曆二年(七七七)の作「螢火を見る」詩(詳註卷十九)に、

巫山秋夜螢火飛 巫山の秋夜 螢火飛ぶ
疎簾巧入坐人衣 疎簾巧に入りて人衣に坐す
忽驚屋裏琴書冷 忽ち驚く屋裏琴書の冷やかなるに
復亂簷前星宿稀 復た亂る簷前星宿の稀なるに

卻邊井欄添箇 却つて井欄を邊りて箇箇を添へ

偶經花葉弄輝輝 偶たま花葉を経て輝輝を弄す

滄江白髮愁看汝 滄江白髮愁へて汝を見る

來歲如今歸未歸 來歲如今歸るや未だ歸らざるや

(注9) 積大典『杜律發揮』に「太劇^ハ甚也。訓^シ苦^ニ、訓^シ苦^ニ、並^ニ未^ニ穩^ニ」と。邵

傳『集解』に「苦意」といい、邵宝『集註』(卷二十一、述懷類)、薛益

「分類」(卷一、述懷)には「劇は戲なり」、「而庵說唐詩」にも「劇は是

れ戲」と。

ちなみに、詳註(卷十八)には「今按ずるに詩意は恐らく是れ太だ難

しの意。煩劇の劇の如し」と。なお、鈴木虎雄『杜少陵詩集』(卷十八

は、《太乾劇》の三字を「太だ乾すに劇^ハ」と訓ずる。

(注10) 薛益「分類」に(注11)に引いた箇所に続けて「群鶯回り翔^ニんで振迅

す。高飛すること戯劇の若く然り。故に云ふ太だ乾に劇すと。毛翹の

乾くを喜ぶなり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注11) 薛益「分類」に「並坐は、両鶯樹枝に立つて、堅凝して動かず、並坐

するが若く然り。皆鳴飛せず、故に交^ニこも湿を愁ふと云ふ」と。宇都宮

遯庵の増広本にも挙げる。

(注12) 『而庵說唐詩』に「若し黄鳥に依らば、只好く坐して家裏に在るに、若

し白鶯に依らば、又た走りて門を出て去るに好し」と。只好は、俗語

的表現で、やむなく、しかたなくの意。

(注13) 顧宸「註解」に「按ずるに下の四句、上の四句と接せず。竟に而截の

体に似たり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

《坐》は、止である。古樂府の「鳥生八九子」に「端坐す秦氏桂樹

の間」と。《鶯坐》は、これに本づく。公の詩にまた云う、「蘆花客

を留めて晩れ、楓樹猿を坐せしめて深し」、また「巫山秋夜螢火飛び、

疎簾巧みに入りて人衣に坐す」と。《劇》は、歡とほぼ同じである。

わざわざ特にこの字を用いるのは、喜色揚揚のありさまを形容する。

旧説に苦と訓じたり戲と訓ずるのは、いずれもまだ穩当ではない。

そもそも雨中では《鶯》もやはりしょんぼりとしおたれているが、

やがて空が霽れると、羽毛の《乾》くのを喜んで、ぱたぱたと飛び

回り、誇らしげに自慢するかのようである。極めて快晴の景を言う

のである。けだし夜雨が朝に連なり、久しくしてようやく雨が上がつて晴れた。それゆえ二羽の(鶯)は樹の枝に並び(坐)し、(湿を愁)えて鳴飛せず、群れなす(鶯)は(江浦)に飛び回り、晴れたのを喜んで飲びにたえない。無聊の際は、一憂一喜し、(黄鶯)が(湿を愁ふ)ようである、やむなく坐して家にいるが、(白鶯)が(乾を劇ぶ)ようになると、また走って門を出て去くのによく、友を訪ね酒を飲み詩を詠じて興を遣うとするゆえんである。或いはいう、後半と前半とつながらず、結局のところ両截体のようだ。この意を詳らかにしないせいである。

晩節漸於三詩律細^{ナリ} 誰家數^カ去酒杯寛^シ

※漸：タン／＼ 細：メンミツ 酒杯寛：オホザカモリ

詩律細^ト言^フ老練圓熟、漸造^ニ精微^ニ。蓋公平生^ニ學問志業皆徒^ニ爲^ル屠龍之技^ト、獨詩頗進^ム耳。彫蟲小藝^ト、亦奚^ヲ以爲^ニ。是感慨之至、自嘲之辭也。抑亦其就路十九^ニ飲^ム、每^ニ以論^{スル}詩律^ヲ爲^ニ好下物^ト。是十九所以最愛^{スル}、故及^レ之也。酒杯寛^ハ謂^フ巨杯也。徐^ハ資^ハ詩^ニ有^ニ三杯闊^ノ語^ヲ。蓋自^ニ公^ノ此句^ヲ一來^ル。夫^ハ公^ハ高陽之徒^ト、非^レ巨杯豪飲^ニ、不足^ニ以遣^レ悶^ヲ、然^{トモ}屢^ク往^テ食^シレハ飲^ム、鄙客人^ハ必厭^レ之^ヲ。乃奉^ニ巨杯^ヲ邀^シ歡^ヲ者^ハ不^レ可^ク多得^ル耳。言^フ此爲^ニ末^ノ作^ヲ引^キ也。以^ニ細^ノ字^ヲ引^キ出^ス寛^ノ字^ヲ、妙^{ナリ}。

(注14) 顧宸「註解」に「晩に詩律に細なりは、是れ百鍊千磨の中従り、漸く精微に造る」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

(注15) 龍を屠る技術。その腕をふるう機会に恵まれない妙技。「莊子」列禦寇篇に「朱萍漫、龍を屠ることを支離益に学び、千金の家を単くせり。三年にして技成りて、其の巧を用ふる所無し」と。

(注16) 詞章を貶めて言う語。例えば、南朝梁の沈約「梁武帝集の序」に「雕虫の小藝、大道を累する無し」と。雕は彫と音義同じ。前漢の賦の大家、揚雄の「法言」吾子篇に、賦について「童子の雕虫篆刻」とし、「壯夫は為さざるなり」といったことによる。

(注17) この言い方、「論語」子路篇に「多しと雖も亦た奚を以て為さん」と見

える。

(注18) 好下物は、佳肴をいう。ちなみに、『李卓吾批点世說新語補』卷十三、豪爽篇に北宋・蘇舜欽(字は子美)の外舅杜祁公(衍)が「漢書」張良伝を読んで興が乗ると酒杯をあおる蘇舜欽について、「此の如き物を下すこと有らば、一斗も多しとするに足らざるなり」と笑ったという話を載せる。

(注19) 徐資の詩は、『全唐詩』卷七〇八から七一に収めるが、この語は見えない。あるいは「主人の緑酒・白魚を恵まるるに謝す」詩(全七〇九)に「樽闊にして最も桂液を澄ますに宜しく、網疏にして殊に未だ霜鱗を損はず」とある「樽闊」の語を指すか。

(注20) 大酒呑み。酈食其が沛公であつた劉邦にまみえた時、「吾れ高陽の酒徒、儒人に非ざるなり」と言つた故事(「史記」酈生陸賈伝)による。

(注21) 『唐詩貫珠』(卷十七、雅事酬贈二)に「細の字を以て寛の字を引き出す、妙」と。

《詩律細なり》とは、老練円熟し、しだいに精微にいたるのを言う。けだし公の平生の學問志業は、どれも世に用いられぬ屠龍の技となり、ただ詩ばかりがいささか進んだだけだ。されど彫蟲の小藝たる詞章も、やはり何の役にも立とうか。これは感慨の極みで、自嘲の辞である。そもそもやはり路十九に就いて飲む際には、いつも《詩律》を論ずることを恰好の佳肴にしていた。これは路十九の最も愛するもので、それゆえこれに言及するのである。《酒杯寛》は、巨杯のことである。徐資の詩に「杯闊」の語がある。けだし公のこの句から来たのであろう。そもそも公は高陽の徒たる大酒呑みで、巨杯で豪飲するのだから、《悶を遣る》には足りない。さりとてしばしば往きて痛飲を食れば、鄙客の人は必ずこれを厭う。かえつて巨杯を奉じ歓迎してくれる者は多くは得られないのだ。このことを言つて結末のために手引をなしているのである。《細》字をもつて《寛》字を引き出しており、絶妙だ。

知君^ハ最愛^ス清狂^ノ客 百遍相過^モ興未^ラ闌^{ナリ}
上六句ハ自述、此二句ハ呈路曹長^ニ。知^ハ者察^シ路十九^ノ意中^ニ而言^フ。

一 作^(注22)唯^(注23)、亦似^(注24)是。清狂ノ客ハ公自謂。既ニ清且狂、所以下不中
爲^(注25)俗人ノ容。抑^(注26)亦百遍相容^(注27)、主人ノ清狂、亦可^(注28)想也。興未^(注29)
闌^(注30)言殷勤不^(注31)盡、所^(注32)謂久^(注33)而敬^(注34)之也。蓋詩酒共^(注35)樂、惟^(注36)
路十九、能愛^(注37)故人^(注38)、容^(注39)我清狂^(注40)、雖^(注41)數^(注42)不^(注43)疏^(注44)、厚情^(注45)
愈^(注46)加^(注47)。故^(注48)因^(注49)雨後春寒^(注50)、欲^(注51)復過飲^(注52)、遣^(注53)悶^(注54)、不^(注55)知果^(注56)
無^(注57)厭否^(注58)。因^(注59)呈^(注60)此詩問^(注61)之^(注62)、所^(注63)以云^(注64)戲^(注65)也。

(注22) 錢注および輯註は(惟)に作る。『而庵說唐詩』も同じ。また錢注や輯
註は(過)字を(看)に作り、「一に過に作る」と注する。さらに(興)
字を(意)に作る。

(注23) 邵傳『集解』に(清狂客)の下に「自ら謂ふ」と注する。なお、清狂
の語、古くは『漢書』昌邑王伝に「清狂不惠」と見え、白痴であること
を意味するが、西晋・左思『魏都賦』(「文選」卷六)に「僕が党清狂
にして、閭閻に怵迫す」とあるのは、言動が社会常識を逸脱しているこ
とをいう。唐詩では、李白の五絶「侍郎叔洞庭に遊ぶに陪醉後三首」
其一に「三杯小阮を容る、酔後清狂を発す」とあり、清の王琦は「詩人
の称する所、多く情を詩酒に縱^(注66)にするを以て清狂と為す」と説く。
ちなみに後の用例として、晩唐の李商隠「無題」(「重帷深く下す莫愁の
堂」)詩に「直ひ相思^(注67)に益無しと道ふも、未だ妨げず惆悵は是れ清狂」
とあり、張相『詩詞曲語辭匯釈』巻一、直の条にこの句例を挙げ、「清狂
は不慧もしくは白痴の義」と解し「痴情」と訳するが、高橋和巳『李商
隠』(中国詩人選集、岩波書店、昭和三十三年)はこれを「反俗の精神」
とみる。杜詩では、他に次の二例がある。

・賀公(賀知章)雅に呉語す、位に在るも常に清狂なり
(「遣興五首」其四、詳註卷七)

・放蕩たり齊趙の間、裘馬頗る清狂なり
(「壯遊」詩、詳註卷十六)

ちなみに、杜甫の「狂」について論じたものに、吳明賢「試論杜甫的
『狂』」(『杜甫研究學刊』一九九六年第三期)、谷口真由実「杜甫の詩と
放浪—詩語『狂』にみる杜甫の心性」(『古今東西—憶良・杜甫・ワーズ
ワース・ホーソンの人と文学』所収。武蔵野書院、一九九九年)、「盛唐
詩人と『狂』の氣風—賀知章から李白・杜甫まで」(佐藤保編『鳳よ鳳よ

—中国文学における「狂」所収、二〇〇九年)がある。

(注24) 『論語』公冶長篇に「晏平仲、人と交はる。久しくして之を敬す」と。
(注25) 『論語』里仁篇に「朋友に數^(注68)しばすれば、斯に疏^(注69)んぜらる」と。
上六句は自らについて述べ、この二句は路曹長に(呈)す。(「知る」
とは、路十九の意中を察して言う。一に(唯)に作るが、この場合
もやはりその方がよいようだ。(清狂の客)は、公自らの謂。(清)
であるうえに(狂)であるのは、俗人に容れられないゆえんである。
そもそもやはり(百遍)も受け容れるというのは、主人の(清狂)
ぶりと同じく想像できるのである。(興未だ闌^(注70)ならず)は、何遍も
繰り返して尽きないの言う。いわゆる「久しくして之を敬す」で
ある。けだし(詩)(酒)共に楽しもうとするのは、ただ路十九だけ
で、よく旧友を愛して、我が(清狂)を寛大に受け容れ、「數^(注71)しば」
しても疎ましがらずに、厚情がいよいよ加わる。それゆえ(雨)後
の春(寒)に因って、また(過)りて飲み(悶を遣)ろうとするの
だが、いったい厭われないでくれるだろうか、どうか。そこでこの詩
を(呈)してこれを問う、(戲)と云うゆえんである。

085 峽中覽物^(注72)

此亦在^(注73)夔府^(注74)、覽^(注75)物景^(注76)、感^(注77)而詠^(注78)之^(注79)。下半ハ嘆^(注80)因病^(注81)過^(注82)
春^(注83)、失^(注84)下^(注85)瀟瀟堆^(注86)之期^(注87)也。

(注1) 瀟瀟堆については、訳注稿(六) 038「所思」詩に「故に錦水に憑^(注88)て双
涙を將^(注89)て、好し過ぎん罌^(注90)塘^(注91)の瀟瀟堆」とあり、その詳解参照。

これもやはり夔府にあって、(物)景を(覽)て、心感じてこれを詠
ずる。後半は病気のせいで春を過^(注92)ごし、瀟瀟堆を下る時期を失した
のを嘆ずるのである。

曾^(注93)爲^(注94)掾吏^(注95)趨^(注96)三輔^(注97) 憶^(注98)在^(注99)潼關^(注100)詩興多^(注101)

※趨…ツトム

公曾^(注102)爲^(注103)華州^(注104)功曹^(注105)、故^(注106)曰^(注107)掾吏^(注108)。三輔^(注109)京兆^(注110)馮翊^(注111)扶風^(注112)三郡^(注113)、

爲_レ帝城之輔_一、故_ニ號_ニ三輔_一ト。華_ハ屬_ニ京兆_一、故_ニ曰_レ趨_ニ三輔_一ト。潼關_ハ在_ニ華州_一、見_レ前_一。其地形勝、山_ハ則華嶽、水_ハ則黄河、皆天下之大觀。所_ニ以多_ニ詩興_一也。

(注2) 『集千家註』(卷十四)の趙次公注に「公會て華州の功曹と爲る、故に掾吏と曰ふ」と。華州の功曹については、訳注稿四、017「鄭県の亭子に題す」の(注3)参照。

(注3) 邵宝『集註』(卷二十二、述懷類)に「三輔は京兆・馮翊・扶風の三郡」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

(注4) 訳注稿(一)、075「諸將五首」其二の詳解に「潼関は華州華陰県に在り」と。

公はかつて華州の功曹であつたので、それゆえ「掾吏」という。「三輔」は、京兆・馮翊・扶風の三郡で、帝城の輔であるので、それゆえ「三輔」と号する。華州は京兆に属す、それゆえ「三輔に趨る」という。「潼関」は華州にあり、前に見える。その地は「形勝」で、山はといえば「華嶽」、水はといえば「黄河」、いずれも天下の大観で、「詩興」が「多」いゆえである。

巫峽_ハ忽如_ニ瞻_ニ華嶽_一ト 蜀江猶似_ニ見_ニ黄河_一ト

※如_ニコ、チス 似_ニヤウナ

夔州ノ大巫山有_ニ登龍起雲等ノ十二峯_一、其下_ニ曰_ニ巫峽_一ト。水經_ノ註_ニ

稱_ニ抗_ニ峯_一岷峨_ニ、偕_ニ嶺_一嶺_ニ衡疑_一、高峻可_レ知。峽間ノ江水、西

自_ニ蜀來_一、故_ニ曰_ニ蜀江_一ト。此見_ニ巫山蜀江之壯_一、感_ニテ而想_ニ像_一、河

嶽之景_一。公之在_ニ華州_一、乃生平極_ニ得意之境_一、本無_ニ足_レレト憶_一。

然_レトモ而思_ニ之_一、所_ニ云_ニ望_ニ并州_一是故郷、故_ニ亦感_ニ其形勝_一之

似_ニ也。

(注5) 『大明一統志』卷七十、夔州府、山川の条に「十二峰」を挙げ、「巫山に在り。望霞・翠屏・朝雲・松巒・集仙・聚鶴・浄壇・上昇・起雲・飛鳳・登龍・聖泉と曰ふ。峽に沿ひ首尾一百六十里」という。

(注6) 『水経注』卷三十四。訳注稿(一)、078「諸將五首」其五の(注6)参照。

(注7) 顧宸「註解」に「公、華州に在る、乃ち生平極めて得意の境、豈に

真に華岳・黄河を憶はんや」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げるが、「乃ち生平極_ニ得意之境_一」と訓点を施す。

(注8) 中唐・賈島の作とされる「桑乾を渡る」詩(『唐詩選』卷七)に、

客舍并州已十霜 客舍并州 已_ニ十霜
歸心日夜憶咸陽 歸心日夜 咸陽を憶ふ

無端更渡桑乾水 端無くも更に渡る桑乾の水

卻望并州是故郷 却_ニて并州を望めば是れ故郷

なお、この詩については、訳注稿(一)、045「秋尽」詩の(注22)参照。

夔州の大巫山には登龍・起雲など十二峰があり、その下を「巫峽」という。「水経注」に「峯を岷峨に抗し、嶺を衡疑に偕_ニにす_一」と称しており、高く峻しいのが分かる。峽間の江水は、西のかた蜀より流れて来るので、それゆえ「蜀江」という。ここは巫山や蜀江の壮大さを見て、心動かされ「河」「嶽」の景を想像している。公が華州にいたのは、なんとも生まれてこのかた極めて我が意を得ない境涯で、本来なら憶い出すのに足らぬのだが、されど今にしてこれと思えば、いわゆる「却_ニて并州を望めば是れ故郷_一」で、それゆえやはりその「形勝」の似ていることに心動かされているのである。

舟中得_ニ病_一移_ニ衾枕_一ト 洞口經_ニ春_一長_ニ薜蘿_一ト

公至_ニ夔_一舟中已_ニ得_ニ病_一、故_ニ就_ニ客舍_一時、同_ニ衾枕_一移_ニ去_一也。

移_ニ居_一夔州ノ郭_ニ詩_ニ伏_ニ雲_一安縣、遷_ニ居_一白帝城。又寄_ニ薛據_一詩_ニ

峽中_一一_ニ臥_ニ病_一、瘡痍終_ニ冬_一春_ニ、是也。洞口_ハ謂_ニ其所_一居深山幽

邃_一。長_ニ薜蘿_一言_ニ時之久_一。蓋_ニ今春自_ニ雲安_一遷_ニ居_一夔府、

已_ニ經_ニ一春_一、未_ニ離_ニ衾枕_一、雖_ニ對_ニ江山之景_一、然_ニト詩興索然_一

也。

(注9) 釈大典『杜律發揮』に「公至_ニ夔_一舟中已_ニ得_ニ病_一、故_ニ移_ニ居_一之時、同_ニ衾枕_一去_ニ也_一」ト。

なお、訳注稿(一)、杜文貞公伝に「公、蜀を離れて自り漂泊五六年。是れより先、舟居中風に染まり、偏身遂げず(峽中物を覽る詩に云ふ、舟中病を得て衾枕を移す、と。蓋し夔に至るの前、已に病を得るなり)」

と。

(注10) 大暦元年(七六六)の作、「居を夔州に移さんとして作る」詩(詳註巻十五)に、次のように見える。

伏枕雲安縣 枕に伏す雲安県

遷居白帝城 居を遷す白帝城

春知催柳別 春は知る柳を催して別れしむるを

江與放船清 江は放船の与に清し

農事聞人説 農事 人の説くを聞き

山光見鳥情 山光 鳥情を見る

禹功饒斷石 禹功 断石饒し

且就土微平 且く土の微平なるに就かん

(注11) 大暦二年(七六七)の作、「薛三郎中璣に寄す」詩(詳註巻十八) 五言 五十二句のうちの第十七・十八句。

(注12) ちなみに、鈴木虎雄『杜少陵詩集』(巻十五)は「洞口」について、詳註(巻十五)に挙げる陳允錫注に「洞口は、五溪の口」というのに拠って、「五溪蠻洞の口をいふ」と。

(注13) 邵宝『集註』(巻二十二、述懷類)に「薛蘿を長うすは、時の久しきを言ふ」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

公は夔州に至る(舟中)ですでに(病を得て)おり、それゆえ客舎に就く時、(衾枕)とともに(移)ったのである。「居を夔州の郭に移す」詩に「枕に伏す雲安県、居を遷す白帝城」とあり、さらに「薛據」[璣]に寄す」詩に「峡中一たび病に臥し、瘡癘終に冬春」というのが、そうである。(洞口)は、その住まいが深山幽邃であること。(薛蘿を長ず)は、時の久しきを言う。けだし今春、雲安より居を夔府に遷して、すでに一春をへたのに、いまだに(衾枕)を離れず、江山の景に向き合っても、(詩興)は索然としているのである。

形勝ハ有レ餘風土惡シ 幾時回レ首一タヒ高歌セシ

※回首：アトミカヘリテ

形勝ハ即謂ニ前聯ニ所レ云。幾時回レ首指去夔ヲ而言。(注14) 高歌ハ即詩興也。(注15) 一トハ者望ニ其難レ得之切ナル也。夔府山水之境、幾如二河

嶽之景、是形勝ハ有レ餘。然トモ風土之異ナル、不レ類ニ關中ニ、病裏鬱鬱厭レト之ヲ久シ矣。然トモ春已ニ深シ、灑灑不レ可レ下。不レ知何ノ時カ得離ニ峡中ニ而去コトヲ、卻回レ首首顧ニ望ニ此景ヲ、快然ト發ニ詩興ニ而一タヒ高歌セシ也。

(注14) 顧宸『註解』に「幾時か首を回らすは、峡を去るを指して言ふ」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注15) 顧宸『註解』に「高歌は即ち詩興なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注16) 張遠『會粹』(巻十四)に「末聯、言ふところは蜀中形勝の地と号すと雖も、而れども風土関中に類せず、首を回らして高歌して、峡中を離れて去らんと欲す」と。関中は、長安一帯を指す。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

《形勝》は、とりもなおさず前聯に云うところに他ならない。《幾時か首を回らす》は、夔州を去ることを指して言う。《高歌》は、とりもなおさず《詩興》である。《一たび》とは、その得難いのを願望するのが切実なことである。夔府の山水の境は、ほとんど《黄河》や《華嶽》の景色のようであって、《形勝は餘有》る。しかし《風土》が異なっており、関中に類似しておらず、病裏鬱鬱としてこれに厭うこと久しかった。されど春はすでに深く、灑灑は下ることができない。いったい何時になったら、峡中を離れてゆき、却って《首を回らし》てこの景を願望し、すかっと《詩興》を発して《一たび高歌》できるのだろうか。

086 暮春

此亦夔州病中ノ感慨。專嘆失出レ峡之時也。

これもやはり夔州での病中の感慨。峡を出る時機を失したのを専ら嘆いているのである。

臥病擁塞ニ在ニ峡中ニ 瀟湘洞庭虛應ニ空(注1)

※応空：ヒロクヨカラン

塞悉則反。擁塞^ハ言^レ不^ラ暢舒^セ。猶^レ云^ニ鬱滯^ト、言^レ見^テ閉^リ于萬山

中^ニ也。應^ハ料度^ノ之辭。空^ハ謂^フ湖天之空闊^{ナルヲ}、對^シ擁塞^ニ而言。公

久^{シク}欲^ス東下^ニ荆楚^ニ、而病^テ阻^リ峽中^ニ、鬱鬱^ト度^レ日^ヲ、則瀟湘洞

庭春水拍^テ天之壯、徒^ニ想^ス像^ス其空闊汗漫^ヲ而已。顧註^ニ云、楚天^ハ

則浩闊^{ニシテ}而不得^レ往^{コトヲ}。峽中則擁滯^ニ而不得^レ出^{コトヲ}。僅^ニ從^ニ閣

上^ニ見^テ景物^ヲ。從^ニ苦處^ニ說^テ入^ニ佳況^ニ、聊以自解^ニ其鬱塞^ヲ耳。

(注1) 錢注(卷十五) および輯註(卷十六) は、《応》字を《映》に作る。顧

宸『註解』も同じ。

(注2) 例えは、『字彙』に「悉則の切、音色。墳なり、窰なり、満なり、充なり」と。

(注3) 邵傳『集解』に「擁塞」の下に「病みて舒暢せず」と注する。

(注4) 釈大典『詩語解』巻下、応の条に「又料度之辭」とし、料度にハカルと左訓を施す。

(注5) 顧宸『註解』に「言ふところは楚天は則ち浩闊にして往くことを得ず。峽中は則ち擁滯して出ることを得ず。僅かに閣上より景物を見る。苦處從り説いて佳況に入る、聊か以て自ら其の鬱塞を解く耳」と。宇都宮

逯庵の増広本にも挙げる。

《塞》は、悉則の反。《擁塞》は、暢舒せざるを言う。鬱滯というのはほぼ同じ。周りはすべて山の中に閉じこめられているのを言うのである。《応》は、料度の辭。《空》は、湖天のひろびろとしていることで、《擁塞》に対して言う。公は久しく東のかた荆楚の地に下ろうと思っていたのだが、《病》んで峽中に阻まれ、鬱々として日を過ごしている。とすれば《瀟湘洞庭》の春になって溢れた水が天に届かんばかりに波立つ壮大さは、そのささざるものなくひろびろとした様子をいたずらに想像するのみだ。顧註に云う、「楚天は浩闊としているのに往くことがかない。峽中は擁滯しているのに出ることがかない。せいぜい閣上より景物を見るばかりだ。苦處より説いて佳況に入っており、まあなんとか自らその鬱塞を解いてゐるのだ」と。

楚天不^レ斷四時^ノ雨 巫峽長吹^ク萬里^ノ風

※四時雨：マタトテモくアマゾラ 長：イツモ 万里風：モノスコキアラシ

夔州^ハ爲^ニ南楚^ニ、故^ニ曰^フ楚天^ト。峽中少^シ晴日^一、雲陰屢^ク起^ル。五雜

組^ニ曰^フ、楚蜀之地^ハ、十日^ニ九^ハ雨^{フル}。其風日晴朗^{ナル者}ハ、一歲中不^レ

能^ス三十日^{アルコト}也。故^ニ公^ノ詩^ニ又云、蜀星陰^ニ見^{コト}少^ク、江雨夜聞^{コト}

多^{シト}。又風常^ニ急^{ニシテ}山鳴^リ谷應^ス、尤爲^ニ可^レ厭^{ナル}。萬里^ハ謂^フ長風之

勢^ト。此即前詩^ニ所謂風土惡^シ、眞^ニ不^レ可^ニ久^{シク}居^ニ之地也。

(注6) 邵宝『集註』(卷二十二、時序類)に「夔州は南楚爲り」と。薛益『分類』(卷一、四時)も同じ。『分類』は、宇都宮逯庵の増広本に、『集註』は詳説に挙げる。

(注7) 明・謝肇淛『五雜俎』巻一、天部一に「楚蜀の地は、則ち十日に九は雨ふる。江干嶺側行くこと甚だ艱難なり。其の風日晴朗なる者は、一歲の中に三十日なること能はざるなり」と。

(注8) 上元元年(七六〇)成都での作、「愁を散ず」二首其一(詳註巻九)に、

久客宜旋旆 久客宜しく旆を旋すべし
興王未息戈 興王未だ戈を息めず

蜀星陰見少 蜀星陰りて見ゆること少なく
江雨夜聞多 江雨夜聞くこと多し

百萬傳深入 百萬深く入るを伝ふ
實區望匪他 實區望むこと他に匪ず

司徒下燕趙 司徒 燕趙を下して
收取舊山河 收取せよ旧山河

《夔州》は南楚の地であるから、それゆえ《楚天》という。峽中は晴れる日が少なく、雲陰がしばしば起る。『五雜俎』に曰く、「楚蜀の地は、十日のうち九日は雨がふる。その風日晴朗なるのは、一歲の中、三十日なることあたわず」と。それゆえ公の詩にまた云う、「蜀星陰りて見ること少なく、江雨夜聞くこと多し」と。そのうえ《風》は常に急に山が鳴り谷がこれにに応じてこだまして、ことのほか厭わしく思われる。《万里》は、長風の勢いのこと。これは前

詩のいわゆる「風土悪し」にほかならない。まことに久しく居られぬ地である。

沙上ノ草閣柳新暗^三 城邊ノ野池蓮欲紅^{ナラント}

※柳新暗^三：ハルモクレユキ 蓮欲紅^三：ナツキニケラシ

水旁^ヲ曰^レ沙^ト。草閣^ハ、草屋之閣。公在^レ夔^ニ自築^キ名^ニ西閣^ト。是也。

柳新^ニ暗^ハ、春深^ニ而縁鬱^{タル}也。蓮^ハ、夏季之花、以^ニ夔^ニ地暖^{ナル}ヲ、欲^ニ先^ニ夏^ニ著^ニ花^ヲ也。柳新^ニ暗^ハ、春已^ニ深^ニ也。蓮欲^ニ紅^{ナル}ト、夏方^ニ迫^ニ也。

峽中^ノ諺^ニ曰^ク、灩澦如^レ馬^ク、瞿唐莫^レ下^{コト}。今節物已^ニ如是^ニ、雖^レ則

病癒^ニ、無^レ由^ニ下^ニ江^ヲ、非^レ俟^ニ秋水之落^ヲ、不^レ可^ニ復^ニ出^ニ峽^ヲ矣。故^ニ傷^ニ爲^ニ病^ノ所^ニ悞^ヲ、後時^ニ失^ニ期^ヲ。不^ニ但^ニ歲序推移之感^ニミナラ^ニ也。

(注9) 訳注稿(八)、056「奉寄して馬巴州に別る」の詳解に「水旁を沙と曰ふ」とあり、その(注12)参照。

(注10) 邵傳『集解』に「公自ら築いて西閣と名づく。夔に在り」と。また顧宸『註解』にも「沙上の草閣」は、即ち西閣なり」というが、この「沙上の草閣」は、「草閣」詩(詳註巻十七)や「江辺の閣に宿す」詩(同上)に見えるごとく、水門のほとりに設けられたもので、「中宵」詩(同上)に「西閣百尋餘、中宵綺疏に歩す」という西閣とは異なる。このこと既に明の王嗣爽『杜臆』に指摘し、仇兆鰲の詳註もそれに従う。なお、『註解』は宇都宮遯庵の増広本に挙げる。

ちなみに、西閣については、「西閣の雨望」、「西閣三度嚴明府の同宿するを期するに至らず」、「西閣二首」、「西閣の夜」(以上、詳註巻十七)、「夜、西閣に宿して暁に元二十一曹長に呈す」、「西閣口号、元二十一に呈す」、「閑夜」、「西閣目に曝さる」、「西閣を離れず」二首(以上巻十八)等の詩がある。

(注11) 訳注稿(六)、038「所思」詩の詳解に「諺に云ふ、灩澦大きな象の如し、瞿唐上る可からず。灩澦大きな馬の如し、瞿唐下る可からず」と。『水経注』巻三十三、江水に見える。

水旁を(沙)という。(草閣)は、草屋の閣。公が夔州で自ら築き「西閣」と名づけたのが、そうである。(柳新に暗し)は、春深くして緑が鬱蒼としていることである。(蓮)は、夏季の花。夔州は暖かいの

で、夏に先んじて花をつけるのである。(柳新に暗し)は、春がすでに深いことである。(蓮紅ならんと欲す)は、夏がまさに迫っていることである。峽中の諺にいう、「灩澦馬の如し、瞿唐下ること莫かれ」と。今、季節の景物はかかるしだいであってみれば、病が癒えたとはいえ、江を下るによしなく、秋になって水量の減るのをまたなければ、再び峽を出ることはできなくなった。それゆえ病に邪魔されて、時期に後れ好機を失したのを傷んでいる。歳序の推移の感ばかりではないのだ。

暮春鴛鴦立三洲渚^三 挾^レ子^ヲ鸞飛^ス還^ニ叢^ニ

※還^ニ：モトノトホリニ

暮春^ヲ承^ニ上^ニ二^ニ句^ヲ。鴛鴦^ハ喜^ニ夏^ノ之鳥^ト、今沙柳新^ニ暗^ク、池蓮欲^ニ紅^{ナル}ト、我正^ニ愁^ニ失^ニ期^ヲ、而彼^ハ則^レ得^ニ時^ヲ揚揚^ス。故^ニ特^ニ下^ニ此^ニ二^ニ字^ヲ。挾^ハ猶^レ攜^ス也。還^ハ本循環不^レ已^ニ之義、因^テ爲^ニ依然

仍^レ舊^ニ之辭^ト。叢^ハ聚^ス也。一叢^ハ猶^レ云^ニ一羣^ト也。鴛鴦將^レ離^ニ立^ニ洲渚^ニ之上^ニ、各自離散^ス而遊^フ、逍遙^ニ甚^ニ樂^ニ。既^ニ而鸞飛^ス、則還^ニ相攜^ス將^レ團圓^ス一叢^ト而去^ス。此偶^ニ從^ニ閣上^ニ所見^ス、感^ニ其聚散自由^ス、而嘆^ニ病客擁塞不^レ能^ス如^レ彼^ノ也。

(注12) 何か基づくところあるのか、不明。

(注13) 釈大典「詩語解」巻上、還の条に「詩家用^ニ還^ニ字^ヲ亦多^シ。大抵循環不^レ已^ニ之義^ト与^ニ循環^ニ来^リ就^ク之義^ト也」と。

(注14) 輯註(巻十六)に「説文に叢は聚なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注15) 顧宸「註解」に「鴛鴦洲渚の上に立ち、飛はんと欲するときは則ち子を挟んで飛び、聚らんと欲するときは則ち子を挟んで一叢す。其の聚散以て自由を得、擁塞する者の常に臥すに似ざるなり」と。宇都宮遯庵の両著にも挙げる。

(暮春)は、ぴたつと上の二句をうける。(鴛鴦)は、夏を喜ぶ鳥。

今、(沙)の(柳)は(新たに暗)く、(池)の(蓮)は(紅ならんと欲)す。自分は峽を出る好期を失したのを愁えている最中なのに、

そいつとはいえば時を得て揚揚と得意気である。それゆえ特にこの二字を下している。《挾》は、携とほぼ同じである。《還》は、本来循環してやまないという意味から、それで依然としてもとどおりの辞となす。《叢》は、聚である。《一叢》は、一群というのとほぼ同じである。《鴛鴦》は、雛をひきつれて《洲渚》のほとりに立ち、おのおのがてんでに散らばって遊び、逍遙（気ままにうろうろ）としてはなはだ楽しげである。やがて《翻り飛》んだかと思つと、《還》た《相携へ団欒（一叢）》して去る。これはたまたま閣上より見えたもの、その聚散が思いのままなるに心感じて病客の《擁塞》して彼らのようにできないのを嘆ずるのである。

087 示獠奴阿段ニ

獠音老。西南夷^{（注1）}曰獠^{（注2）}。與^{（注3）}楚蜀^{（注4）}接壤^{（注5）}。蓋南蠻一種^{（注6）}山夷。今蘭舶所攜崑崙奴之屬^{（注7）}、勇悍輕生^{（注8）}、矯健^{（注9）}、善奔^{（注10）}。公蓋在^{（注11）}夔畜^{（注12）}之。阿段^{（注13）}其名。本集^{（注14）}有秋行官張望督^{（注15）}促^{（注16）}東渚^{（注17）}刈^{（注18）}稻^{（注19）}。向^{（注20）}畢^{（注21）}、遣^{（注22）}女奴阿稽豎子阿段^{（注23）}往^{（注24）}問^{（注25）}詩^{（注26）}。是公之隸人。此詩^{（注27）}、因^{（注28）}其修^{（注29）}引^{（注30）}泉^{（注31）}之竹^{（注32）}而^{（注33）}笑^{（注34）}之也^{（注35）}。

（注1）邵宝『集註』（卷二十三、送別類）および薛益『分類』（卷二、雜賦）に「韻を按ずるに獠音寥、註に云はく青猷を獠と曰ふ。又た音老、註に云はく西南夷の名」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。韻は「礼部韻略」のことであろう。なお、獠族については、『通典』卷一八七、辺防三、南蛮上に記述がある。

（注2）寺島良安『和漢三才図会』卷十四、外夷人物、崑崙屠斯の条に「按ずるに今も亦た阿蘭陀船の中、乗し来る所の人、身黒漆の如くなる者有り、俗に呼びて黒ん坊と曰ふ。其の身軽捷にして能く橋上を走る。蓋し久呂牟とは崑崙の唐音なり。坊とは無髪の人通称なり」と。ちなみに、唐代の崑崙奴については、マレー系人、あるいはアフリカ系黒人とする説などがある（今村与志雄訳『唐宋伝奇集（下）』、岩波文庫、「崑崙奴」訳注参照）が、獠族とは関わりがない。

（注3）詳註卷十九。但し、《刈》字を《耗》に作り、《遣》の上に《清晨》の二字がある。

（注4）邵宝『集註』および薛益『分類』に「此れ獠奴、泉を引く竹を修めて勞有るに因つて、詩を示して以て之を奨むるなり」と。

（注5）《獠》、字音は老。西南夷を獠という。楚蜀と境を接する。けだし南蛮の山岳民の一種であろう。今、オランダ船が連れてくる崑崙奴の属で、勇悍で命を何とも思わず、頑強で健脚である。公はけだし夔州にあつて養つていたのである。《阿段》は、その名。本集に「秋、行官張望、東渚に稻を刈るを督促して、畢るに向んとす。女奴阿稽・豎子阿段を遣はし往きて問はしむ」詩がある。これは公の隸僕。この詩は、泉を引く竹筒を修理してくれので褒めているのである。

山木蒼蒼^{（注1）}落日曛^{（注2）} 竹竿裊裊細泉分^{（注3）}

※蒼蒼：モノスゴク 裊裊：タハ／＼

山木蒼蒼^{（注4）}、言^{（注5）}山深^{（注6）}也。曛^{（注7）}、日入^{（注8）}餘光^{（注9）}也。裊裊^{（注10）}、長弱^{（注11）}貌^{（注12）}。分^{（注13）}、言^{（注14）}分派^{（注15）}而至^{（注16）}。夔人山居無^{（注17）}井^{（注18）}、竹筒引^{（注19）}泉^{（注20）}爲^{（注21）}用^{（注22）}。源遠^{（注23）}流長^{（注24）}、有^{（注25）}數百丈^{（注26）}者^{（注27）}。故^{（注28）}言^{（注29）}水筒一脈之泉、裊裊蟠^{（注30）}接^{（注31）}山腹^{（注32）}、自^{（注33）}山木蒼蒼中^{（注34）}而^{（注35）}流^{（注36）}下^{（注37）}也。蓋各處引^{（注38）}泉、無慮數十筒、故^{（注39）}曰細泉分^{（注40）}。

（注5）邵宝『集註』および薛益『分類』に「曛は日入る餘光なり」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

（注6）邵宝『集註』および薛益『分類』に「裊裊は長弱の貌」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

（注7）邵保『集解』に「夔に井無し。竹、泉を引きて山腹の間に蟠接す。數百丈なる者有り」と。

《山木蒼蒼》は、山が深いのを言うのである。《曛》は、日没の餘光である。《裊》、字音は嫋。《裊裊》は、長く弱いさま。《分》は、水路を分かつて至るを言う。夔州の民は山居して井戸がなく、竹筒で泉を引いて用とした。源は遠く水路は長く、數百丈にもなるものが

ある。それゆえ竹筒を通る一筋の水脈が、《裊裊》として山腹に接してめぐり、林木の《蒼蒼》たる中より流れ下るのを言うのである。けだし各処に泉を引くこと、およそ数十筒、それゆえ《細泉分かる》という。

郡人入夜^レ夜^ニ争^ニ餘瀝^ヲ 賢子尋^ニ源^ヲ獨^ニ不^レ聞

※餘瀝^ニノコリノシツク 不聞^ニシラステイ

入^レ夜^ニ承^ク落^日ヲ。賢子^ハ謂^ニ獠奴^ヲ。舊本作^ニ稚子^ニ。今從^ニ全唐詩^ニ。竹筒或^ハ塞^レハ^レ則中斷^{シテ}而水不^レ至、一鄉舉渴^ス、故^ニ争^ニ餘瀝^ヲ、然^キ此誠^ニ末^ニ矣。獠奴以^ニ一賢子^ヲ犯^{シテ}夜^ヲ入^ニ山^ニ、直^ニ尋^ニ源頭^ヲ爲^ニ修^ニ水脈^ヲ、不^レ聞^ニ與^ニ人^ヲ争^ニ閥^ヲ、是獨治^ニ本^ヲ者、抑^ク亦偉^{ナリ}矣。

(注8) ちなみに、杜甫には、

・「賢子至る」(詳註卷十九)

・「小豎に課して舎北の果林を鋤斫せしむ」(詳註卷十九)

・「小豎に課して舎北の果林を鋤斫せしむ。枝蔓荒穢淨し訖りて牀を移す」三首(詳註卷二十)がある。

(注9) 邵傳『集解』は《稚子》に作る。稚は、稚の別体字。

(注10) 『全唐詩』卷二十九。「一に稚に作る」と注する。ちなみに『全唐詩』の杜甫詩巻は、錢注本を底本としたものである。輯註(卷十三)も《豎》に作り、「黄は稚に作る」と注する。黄は、黄鶴のこと。

《夜に入る》は、《落日》を承ける。《賢子》は、《獠奴》のこと。旧本に《稚子》に作る。今、『全唐詩』に従う。竹筒が塞がることがあれば中断して水が来ず、一郷全体が渴する。それゆえ《餘瀝を争ふ》ことになるのだが、しかしこれは誠に些末なことだ。《獠奴》は、一介の《賢子》の身でありながら夜禁を犯して山に入り、直ちに《源頭を《尋》ねてために水脈を修理し、人と争闘するのを《聞》かない、これこそ根本を治めることで、そもそもやはりえらいものだ。

病渴^ニ三^ニ更^ニ同^ニ白首^ヲ 傳^ニ聲^ヲ一^ニ注^ニ溼^ニ青雲^ヲ

注ハ水流射^ル也。青雲ハ言^ニ其來路之高^ヲ。公素病^ニ肺^ヲ、一夜偶^ニ水

筒中斷、苦^ニ渴^ヲ殊^ニ甚^シ。頼^ニ獠奴^ヲ去^テ修^ニ水道^ヲ、回^ニ首^ヲ望^ニ而待^ニ之^ヲ、果然潺湲傳^ニ響^ヲ、溼^ニ雲霄^ヲ而注^ニ來^ニ也。一之字寫^ニ得^ニ其始^ヲ、迸^ニ來^ニ之勢^ヲ。

(注11) 邵宝『集註』および薛益『分類』に「注は水の流れ射る貌」と。『分類』は宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

(注12) 杜甫の肺病については、訳注稿(中) 079「十二月一日三首」其一の(注27) 参照。

《注》は、水が流れそそぐことである。《青雲》は、高いところからやって来るのを言う。公はふだんから肺を病んでおり、ある夜たまたま水を引く筒が途中で切れ、渴を苦しむことがとりわけ甚しかった。《獠奴》が水道を修理しにいつてくれたので、《首》を《回》らしてそれを待ち望んでみると、はたして潺湲(さらさら)と響きを伝え、雲霄を《湿》らせて《注》ぎ来たったのである。《一》の字は、そのようやく勢いよく迸り来る様子を写し得ている。

曾驚^ニ陶侃^ヲ胡奴^ヲ異 怪^ニ爾^ヲ常^ニ穿^ニ虎豹^ヲ羣^ヲ

※驚^ニビツクリス 異^ニフシギ

阿段ハ夷人、故^ニ以^ニ胡奴^ヲ比^ス之。劉敬叔^ハ異苑^ニ晉陶侃嘗^ニ得^ニ胡奴^ヲ。不^レ喜^ニ言語^ヲ、常^ニ默坐^ス。侃一日出^ニ郊^ニ、奴執^ニ鞭^ヲ以^ニ隨^ニ。有^ニ胡僧^ヲ見^ニ而驚^ニ。禮^{シテ}曰、此海山使者也。侃異^ニ之。是夜失^ニ其所在^ヲ。句中驚異^ノ二字、皆有^ニ所^ニ本^ヲ。虎豹^ノ羣^ニ與^ニ山木蒼蒼^ニ相應^ニ。獠奴以^ニ童稚之年^ヲ、夜行不^レ避^ニ虎豹^ヲ、深山尋^ニ源^ヲ、通^ニ水筒之滯^ヲ。自^ニ日暝^ニ時^ニ獨往^ニ而至^ニ三更^ニ、泉聲始^ニ到^ニ。其涉^ニ遠^ヲ冒險^ヲ、勞亦甚^シ矣。曾聞^ニ陶侃^ヲ胡奴之事^ヲ、驚^ニ其爲^ニ異人^ニ。今此賢子深夜穿^ニ猛獸叢中^ヲ、固^ニ非^ニ凡人^ノ所^ニ能^ス、殆所^ニ謂^ニ海山使者^ニ、則陶侃^ハ胡奴不^レ足^ニ復^ニ異^ニ耳。曰^ニ常^ニ穿^ニ、見^ニ平常不^レ畏^ニ夜行^ニ深山^ヲ、不^ニ但是夜^ニ也。

(注12) 顧宸『註解』に「意ふに阿段或いは夷人、故に公は胡奴を以て之を比す」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

(注13) 六朝宋・劉敬叔『異苑』卷五、海山使者の条。但し、陶侃胡奴の故事について、輯注に「按ずるに此の事、今本劉敬叔異苑に見ゆ。説く者偽撰を以て之を疑ふ。當に之を考すべし」という。輯注は宇都宮遼庵の増広本にも挙げる。

なお、清の陳廷敬『杜律詩話』や浦起龍『讀杜心解』(卷四之二)のごとく、晩唐・袁郊『甘澤謠』に見える杜甫と同時代の陶侃の故事を踏まえるとする説もある。古川末喜『杜甫農業詩研究』(知泉書館、二〇〇八年)第三部第二章「杜甫の農的生活を支えた使用人と夔州時代の生活詩」第二節「阿段」には、この詩を挙げ、その七八句を「泳ぎがうまかった陶侃の胡奴はついに蛟龍のために死んだ、お前が山に入るときも慎重にしたほうがよいぞ」と解し、「怪」は戒める意も含むとする。

〔阿段〕は夷人であるから、それゆえ〔胡奴〕をもつてこれに比す。劉敬叔の『異苑』に、「晋の陶侃はかつて胡奴を得たが、話すのを喜ばず、いつも黙ったまま坐していた。陶侃がある日、郊外に出かけたおり、奴は御者として鞭を執つて随った。胡僧が見て驚き、拝礼するというのに、この方は海山の使者です、と。陶侃はこれを異とした。その夜、行方がわからなくなった」と。句中の〔驚〕〔異〕の二字は、いずれも本づくところがある。〔虎豹の群〕は、〔山木蒼蒼〕と対応している。〔獠奴〕は童稚の年でありながら、夜行して〔虎豹〕を避けず、深山に〔源を尋〕ね、水筒の滞つたのを通じさせた。〔日暝〕ずる夕暮れ時からひとり行き〔三更〕(午前零時)に至つて、水音がやと届いてきた。その遠きを涉り險を冒すのは、苦勞も甚しい。かつて〔陶侃胡奴〕の故事を聞き、その異人たるに驚いたが、今この〔豎子〕が深夜に猛獸の住む叢中をくぐり抜けたのは、もとより凡人の能くするところではない、ほとんどいわゆる「海山の使者」である。してみれば、〔陶侃の胡奴〕は、もはや異とするに足らないのだ。〔常に穿つ〕というのは、日ごろ夜に深山を行くのを畏れないことをあらわしており、ただこの〔夜〕ばかりではないのである。

088 七月一日題終明府水樓

稱^ニ郡守縣令^ヲ曰^ハ明府^一。言^ハ賢明之府君^{ナル}也。終明府名未詳^{ナラ}。以^ニ公^ノ自註^ヲ考^レ之^ヲ、時^ニ爲^ニ夔州^ノ功曹參軍^一、兼攝^ス奉節縣^ノ令^ヲ。蓋樓即在^ニ奉節縣^ノ署中^一也。

(注1) 杜甫の五律「北隣」詩に「明府」の語が見え、輯註(卷七)は錢注(卷十一)に拠つて、「後漢の張湛伝の注に、郡の居る所を府と曰ふ。明府は尊貴の稱。韓延寿、東郡の太守と爲り、門卒之を明府と謂ふ。賓退録に明府は漢人以て太守を稱し、唐人以て県令を稱す。県令は漢人則ち之を明庭と謂ふ」という。宇都宮遼庵増広本の「北隣」詩にも輯註を引く。なお、『賓退録』は、南宋・趙与峕の著。その卷九に見える。

(注2) 邵傳『集解』に「公の自註に、終明府は功曹なり。奉節の令を兼攝す。故に此の語有り。観奏を付つて、真に即くなり」と。観奏は、勤務評定(の結果を奏上すること)。

(注3) 『唐詩貫珠』(卷十一、投贈令長附少府)に「大約此の樓は即ち奉節県署中に在り」と。

郡守や県令を称して「明府」という。賢明な府君であるのを言うのである。〔終明府〕は、名未詳。公の自註から考えると、時に夔州の功曹參軍で、奉節県令を兼務代行していた。けれど〔樓〕は奉節県の官署内にあったのであろう。

高棟^ニ層軒^ハ已^ニ自涼^一 秋風此日灑^ニ衣裳^一

高棟^ハ謂^フ樓^ヲ。層軒^ハ樓簷深遠^ニ、所以日氣不^レ侵也。灑^ノ字應^ニ水樓^一而言。夫^レ七月朔^ハ、正暑熱^ニ之候^一、不^レ當^ニ清涼^一、而因^ニ樓軒高遠^一、已^ニ自涼^一矣。又加^ニ之^一秋風吹起^リ、颯爽拂^ニ座^一、水氣所^レ含^ム、衣冷^ニ如^ニ灑^一也。

(注4) 〔層〕字、錢注(卷十六)および輯註(卷十六)は〔曾〕に作る。

(注5) 『唐詩貫珠』に「高棟は樓を謂ふ。層軒は樓簷深遠、自然に涼を覚ゆる所以なり」と。

(注6) 『唐詩貫珠』に「蓋し七月朔は正に暑熱の候、該に清涼なるべからず。今却つて樓軒高遠に因つて、已に是れ涼し矣。又た之に加ふるに秋風を以てするなり」云々と。

〔注7〕 詩句の「已自」は、「已に自ら」と訓読するが、この二字で「すでに」の意。自は副詞につく接尾辞で、六朝以来の口語的表現。

《高棟》は、楼のこと。《層軒》は、楼の簷が奥深く、日差しがじかに入ってこないわけである。《灑》字は、《水楼》に応じて言う。そもそも七月朔はちょうど暑熱の候で、清涼であるはずはないのだが、楼の軒が高く奥深いために、《已に自ら涼し》くなっている。そのうえ《秋風》が吹き起こり、颯爽として座を払い、水気を含むところ、《衣》はひんやりとして《灑》いだようである。

脩然欲下_二陰山_一雪、不_レ去_二非_レ無_二漢署_一香_一

脩音叔。飛_{コト}疾_キ之_レ貌。陰山ハ在_二塞外_一、至_レハ秋_ニ則_二雪_一フル、故_ニ以_レ爲_レ喩。極言_二涼冷ナルヲ_一也。不_レ去_二言_レ不_二去_一爲_二朝官_一也。漢_ニ尙書_一

郎口含_二雞舌香_一奏_二事_一。又郎官ハ入_二奉_二宿衛_一ヲ、出_二宰_二百里_一ニ、

故_ニ因_二縣令_一ニ、牽_二及_二尙書郎_一。蓋終久シク滯_二于郡之掾吏_一ニ、未_レ嘗_二爲_二合香署中_一人_一。今已_ニ攝_二縣令_一ヲ、則與_二郎官_一相當、是不_レ無_二漢署之香_一矣。此蓋微辭。贊_二其安_一スルヲ于縣職ニ、而惜_二其清高之

才也。或_二是座上有_レ香、因_二託_二而_レ言_一之_一。此首重_二在水樓清涼_一幽致ニ、即以贊_二主人之才_一。人境雙清、益_二覺_二爽快_一。

〔注8〕 例えは、『広韻』入声屋韻に「脩、飛疾の貌」と。

〔注9〕 顧宸『註解』に「漢の制、尙書郎四人。口に雞舌香を含み以て事を奏す」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。雞舌香は、丁香。

〔注10〕 釈大典『杜律發揮』に「第四句諸注未_レ明。余窃_二以爲漢_一時官人_ニ奉_二宿衛_一、出_二宰_二百里_一、則_二県令_一与_二郎官_一相当」と。百里は、一県の地をいう。ちなみに、「書言故事」巻九、県宰類に「常に県宰を称して百里と曰ふ。漢・明帝の曰く、郎官出でて百里に宰たり」云々と。

〔注11〕 釈大典『杜律發揮』に（注10）に挙げた箇所に続けて「此言_二明府雖_レ不_レ去_二在_二朝_一、亦_レ不_レ無_二漢署之香_一」と。

ちなみに、顧宸『註解』は、第四句の主語を作者の杜甫だとし、「我が蜀に淹留して去らざる者は、正に此の楼の勝境を愛すればなり」と説き、鈴木虎雄『杜少陵詩集』（巻十九）も、同じく杜甫自身とみて、「自分

分が漢殿へと往かぬのは郎署の雞舌香が無いためではない。（ここが涼

しくてここちよいからである）」と解する。顧宸『註解』は、宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

〔注12〕 釈大典『杜律發揮』に（注11）に挙げた箇所に続けて「或_二是座中_一有_二香、因_二及_レ之_一」と。

〔注13〕 『唐詩貫珠』に「此の首重きこと水楼清涼の幽致に在り、即ち以て終明府の雅趣を賛す。人境双清、以て真に即して仙令と爲る可き耳」と。

《脩》、字音は叔。飛ぶことの疾きさま。《陰山》は、塞外にあり、秋になると《雪》がふる、それゆえ喩えとした。極めて涼冷なるを言うのである。《去らず》は、去つて朝廷の官吏とならぬことを言うのである。漢代、尙書郎は口に雞舌香を含んで事を奏した。また郎官は朝廷に入つて宿衛を奉じ、出でて百里四方の地に宰（長官）となつた。それゆえ県令にちなんで、引いて尙書郎のことに及んでい

る。けだし終明府は久しく郡の掾吏に滞り、いまだかつて《香》を含んで勤務する官署の人となつたことがないのであろう。今もう県令を撰しておるからには、郎官に相当し、《漢署の香》が《無》いわけがない。これはけだし微辞であらう。その県職に安んじていることを賛え、その清高の才を惜しんでいるのである。あるいは座上に香あり、それで託してこれを言うのかも知れない。この詩の重点は

《水楼》の清涼の幽致にあるが、とりもなおさず主人の才を賛える。その人その境ともに清らかで、ますます爽快なるを覚える。

絶壁過_二雲開_一錦繡_一 疎松隔_二水奏_二笙簧_一

※過：ヤリスゴシテ 隔水：カハノアチラニテ

錦繡ハ言_二美景_一。過_二スハ雲_一使_二行雲_一ヲ過_二去_一也。蓋初登臨ノ時、山爲_二雲_一所_レ遮、既_ニ而雲_一過去、丹崖翠壁之景、美觀斑斕如_二開_一錦繡也。簧_二者笙之管端_一金葉也。凡笙竽皆以_二竹_一植_二于匏中_一、而竅_二其管底之側_一、以_二薄金_一障_二之_一。吹_二則鼓_二之_一而出聲、所_レ謂

簧也。此贊_二松籟溪流、涼聲相和_一之爽_一、亦可_二下_二以清_二人心_一而除_二塵俗_一矣。

〔注16〕

(注14) 〈隔〉字、錢注および輯註は〈夾〉に作り、輯註に「黄は隔に作る」と注す。黄は、黄鶴のこと。輯註は、宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

(注15) 『詩経』王風・君子陽陽に「左に簧を執る」とあり、朱子の集伝に「簧は、笙管中の金葉なり。蓋し笙管皆竹管を以て匏中に植て、而して其の管底の側を敷ち、薄金葉を以て之を障る。吹けば則ち之を鼓して声を出だす、所謂簧なり」と。なお「字彙」の記述も、これを踏襲する。

(注16) 『唐詩貫珠』に「五六又た石壁澗水松雲有り、以て人心を清くし塵をを除く可し」と。

〈錦繡〉は、美景を言う。〈雲を過ぐす〉は、行く〈雲〉を〈過〉ぎ去らせることである。けだし登臨したばかりの時は、山は〈雲〉に遮られていたが、やがて〈雲〉が〈過〉ぎ去ると、丹崖翠壁の景色は、その美しさが目にも鮮やかで〈錦繡〉を〈開〉いたかのようである。〈簧〉とは、〈笙〉の管端にある金属製の葉状のものである。すべて笙竽はどれも竹の管を匏の中に立て、その管底の側に穴をあけて薄い金属片でふさぐ。吹くとそれが振動して音を出す、いわゆる〈簧〉である。これは松籟と溪流とが、涼声相和する爽やかさを讃えており、やはり人心を清くし塵を除くことができるのである。

看_レ君_ハ互_ニ著_二王喬_カ履_ヲ 眞賜還_ニ疑出_ル尙方_ニ

看_ハ謂_二行_ク看_ヲ。後漢王喬_カ傳、喬有_二神術_一。明帝時爲_二尙書郎_一。出_テ爲_二葉令_一。漢_ノ法畿内_ノ長史_ハ毎月朔旦常_ニ自_レ縣詣_二臺_ニ朝_ス。帝怪_二其來_{コト}數_ニ而_一不_レ見_二車騎_一、密_ニ令_二大史_ヲ伺_二望_ニ之_一。言_ハ其臨_ニ至_ニ有_二雙鳧_一、從_二南飛來_上。於是候_ニ鳧_一至_ニ、舉_レ網_ヲ張_レ之、但得_二一雙鳧_一焉。乃詔_二尙方_ニ診視_{セシム}、則_二四年前所_レ賜_二尙書_ノ官屬_ニ履_ヲ也。尙方_ハ少府_ノ屬官_也。主_レ造_二供御器物_一之局_也。眞賜_ハ謂_二履_ヲ也。公自註_二終明府_ハ功曹也。兼_二攝_二奉節_ノ令_一。故_ニ有_二此語_一。佇_二觀奏_ヲ即_レ眞_ニ也。此言君處_二此幽境_一、樓居如_レ仙。負_二出_二物表_一、非_二凡人_ノ所_レ及_一。直_ニ比_二王喬_ノ作_二仙令_一、則_レ雖_レ未_レ即_レ眞_ニ、然_モ已_ニ疑_二其履受_二尙方_ノ之眞賜_一。行_ク互_ニ如_二三

喬_カ之飛_レ鳧_ヲ而朝_{スル}。必惹_二漢署之香_一、豈長_二勞_二于風塵_一者_{ナランヤ}哉。蓋仙鳧陵_ハ空_ニ、互_ニ憑_二高_ニ而飛_一、故_ニ因_二樓高_ニ而想_二之_一也。王喬入朝_{スルハ}、係_二朔旦_ノ故事_一。恰合_二題面_一、應_二第二句_一、且其履所賜_二尙書_ノ官屬_一、亦與_二第四句_一映帶_ス。諸註皆不_レ認_二此義_一、負_二作者_一之矣。

(注17) 『後漢書』方術列伝上。なお、「漢の法、畿内の長史は毎月朔旦、常に県自ら台に詣つて朝す」というのは、『列仙伝』の王喬伝に見える。『列仙伝』は、『唐詩貫珠』に挙げる。

(注18) 輯註に「漢の百官公卿表に少府の属官、一に尙方と曰ふ。顔師古曰く、尙方は祭器の物を作るを主ると」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

(注19) 邵宝『集註』(卷二十三、樓閣類)に「尙方は、供御器物を作ることをする局」と。宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

(注20) 『夜航詩話』卷三に、「風塵も亦た数義有り」として挙げるうち、その一つに「京官に対して郡県を謂ふ」とある。

(注21) 釈大典『杜律發揮』に「王喬亦漢人。其履所賜尙書官屬云尔、則正_二相照應_一」と。尔は、爾の俗字。

〈看〉は、行くゆく看んということ。『後漢書』王喬伝に、「(王)喬には神術があつた。明帝の時、尙書郎となり、出でて葉県の令となつた。漢の法律では、畿内の長史は毎月朔旦、常例として県から朝廷に参内することになつてゐた。帝はその来ることしばしばであるのに車騎の姿が見えないのを怪しんで、密かに大「太」史にこれを伺い望ませた。言上するに、そのやってくるに際してつがいの鳧が南から飛んで来ました、と。そこで鳧がくるのを待ち受けて、網を張ると、ただ一足の鳧を得ただけであつた。そこで尙方に詔してよく調べさせると、四年前に尙書の官属に賜つた履物であつた」と。

〈尙方〉は、少府の属官。供御の器物を製造するのを司る部局。〈眞賜〉は、〈履〉のことである。公の自註に「終明府は功曹なり。兼ねて奉節の令を撰す。故に此の語有り。觀奏を佇つて眞に即くなり」と。ここで言う意味は、君はこの幽境におり、樓居は仙人のごとく

して、はるかに俗世間の外に出で、凡人の及ぶ所ではない。直ちに「王喬」が仙令となったのに比しているのは、いまだ「真に即」いてはいないとはいえ、されどすでにその「履」は「尚方」の「真賜」を受けたものかと思われる。ゆくゆくはおそらく「王喬」が鳥を飛ばして朝廷に参内したようになるはずだ。きつと「漢署の香」を染みこませるだろう、どうしてもいつまでもずっと風塵に労する者であらうかと、いうのである。けれど仙鳥は空を陵ぎ、高きに憑つて飛ぶのがふさわしい、それゆえ楼の高きにちなんでもこれを想うのである。「王喬」が入りて朝するは、朔旦の故事にかかる。ぴたと題面に合致し、第二句と応じている。それにその「履」は尚書の官属に賜ったもので、やはりまた第四句と互いに反映する。諸註はどれもこの意味を弁識せず、作者の意向にそむくことになっている。

089 黄草

峽名。在涪州之西^(注1)。山草多^(注2)黄ナリ、故名^(注3)。此詩ハ公在梓聞^(注4)時作。取^(注5)起句ノ二字爲^(注6)題耳。寶應元年秋、西川^(注7)兵馬使徐知道反^(注8)。蜀大^(注9)亂。八月知道爲^(注10)其下^(注11)所殺。明年改^(注12)元廣德^(注13)。冬吐蕃入寇^(注14)。陷^(注15)松維保^(注16)三州^(注17)。七八句所^(注18)以憂慮^(注19)也。泥^(注20)甲山^(注21)ノ句^(注22)、以爲^(注23)在^(注24)夔作^(注25)、編次在^(注26)此^(注27)、誤^(注28)矣。

(注1) 輯註(卷十三)に「益州記に涪州の黄葛峽に相思崖有り。今、黄草峽と名づく。山草多く黄なり、故に名づく」と。また「通鑑大暦四年に涪州の守捉使王守仙、兵を黄草峽に伏すと。胡三省曰く、黄草峽は涪州の西に在り」といふのを挙げる。輯註は、宇都宮遯庵の増広本にも引く。涪州は、その治所が今の重慶市涪陵区に置かれた。通鑑は「資治通鑑」のこと。但し、増広本は「大暦四年」を誤って「大鑑四年」に作る。

(注2) 訳注稿(六)、040「野を望む」詩の(注8)参照。

(注3) 邵傳『集解』に「此の時、夔に在りしとき作る」と。(注13)に挙げる輯註も参照。なお、四川省文史研究館編『杜甫年譜』(四川人民出版社、一九五六年)や陳貽燦『杜甫評伝』(上海古籍出版社、一九八四年)のこ

とく、この詩を大暦元年(七六六)、夔州での作とみるのが現在の通説。峽の名。涪州の西にある。山の草は多く黄ばんでおり、それゆえ名づく。この詩は、公が梓州・閬州に滞在していた時の作。起句の二字を取って題としたのだ。宝應元年(七六二)の秋、西川兵馬使の徐知道が反し、蜀は大いに乱れた。八月、徐知道はその配下に殺された。明年、広徳と改元した。冬、吐蕃が入寇し、松・維・保の三州を陥れた。七八句で憂慮するゆえんである。「赤甲山」の句に拘泥し、夔州にある時の作とし、ここに編次するのは、誤まっている。黄草峽西船不^(注1)歸 赤甲山下行人稀^(注2)

赤甲山^(注3)ハ在^(注4)夔州ノ城北^(注5)。山甚高大、不^(注6)生^(注7)樹木^(注8)、其石悉^(注9)赤^(注10)、如^(注11)二人袒^(注12)跽^(注13)、故^(注14)名^(注15)。俗省^(注16)作^(注17)甲^(注18)。行人^(注19)一^(注20)作^(注21)二人^(注22)行^(注23)、似^(注24)是^(注25)。案^(注26)スルニ涪州ハ東蜀ノ極北界、夔州ハ則東赴^(注27)楚^(注28)之路、相去^(注29)數百里。此嘆^(注30)スル因^(注31)成都之亂^(注32)而東蜀亦水陸皆梗^(注33)也。黄草峽赤甲山惡名可^(注34)厭、特^(注35)用^(注36)之^(注37)、所^(注38)以寓^(注39)愁^(注40)也。

(注4) 『大明一統志』卷七十、夔州府、赤甲山の条に「今の夔州の城北に在り」と。輯註に挙げ、宇都宮遯庵の増広本にも引く。

(注5) 輯註に『水経注』卷三十三、江水の「山甚だ高大にして、樹木を生ぜず、其の石悉く赤し、土人の云く、人の胛を袒ぐが如しと。故に之を赤甲山と謂ふ」といふのを挙げる。胛は、肩甲骨。輯註は、宇都宮遯庵の増広本にも引く。なお、簡錦松『杜甫夔州詩現地研究』(台湾学生書局、一九九九年)に拠れば、現在、子陽山と呼ばれているのが当時の赤甲山で、赤甲山と称されているのは当時の白塩山にあたるという。宋開玉『杜詩釈地』(上海古籍出版社、二〇〇四年)も簡錦松の説に従う。

(注6) 錢注(卷十二)は「行人」の下に「一に人行に作る」、輯註(卷十三)は「正異、人行に作る」と注する。正異は、宋の蔡興宗『杜少陵詩集正異』(杜詩正異)のこと。

(注7) 邵傳『集解』に「水陸道梗、崔旰蜀を乱すの時なり」と。

「赤甲山」は、夔州の城北にある。山ははなはだ高大で、樹木が生えず、その石はのこらず赤くて、人が肩ぬぎしたごとくであるので、それゆえ名づく。俗に(胛を)省略して甲に作る。「行人」は、一に

《人行》に作るが、その方がいいようだ。案ずるに涪州は東蜀の極北界、夔州は東のかた楚に赴く路で、相去ること数百里。これは成都の乱によって東蜀もやはり水路陸路どれも塞がったのを嘆くのである。《黄草峡》《赤甲山》は悪名厭うべきなのに、わざわざこれを用いているのは、愁を寓するゆえんである。

秦中ノ驛使無消息 蜀道ノ兵戈有是非

※消息…タヨリ 是非…タシカナラズ

秦中ハ謂ニ長安ヲ。秦ノ故都也。此直ニ承テ上ヲ而言。叛亂爲テ梗ヲ、驛使不通ヲ、思念シテ家郷ヲ、莫得ニ其消息也。蜀道ノ兵戈指ニ徐知道之亂ヲ。有ニ是非者、其信不レ一ナラ、是非莫レ辨スルコト也。梓去コト成都ノ纔三百里、而是非失レ眞ヲ、亂離之景象也。

（注8）薛益『分類』（卷二、地理）に「秦中は長安なり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

（注9）顧宸『註解』に「公時に梓州に在り。秦中を思念すれども、其の消息を得ること莫し」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

（注10）顧宸『註解』に「蜀道の兵戈は徐知道の乱を指す」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。（注13）も参照。

ちなみに、輯註は崔旰の乱とし、「史を按ずるに、杜鴻漸蜀に至り、崔旰と楊子琳・柏茂林等各おの刺史・防御を授けられ、而して崔旰専ら主將を殺せし罪を正さず、故に兵戈是非の語有り。蓋し言ふところは崔成都を乱し、柏・楊之を討つも、其の是非は弁ずること無かる可からず。然れども旰本と功を西山に建つ。郭英父其の妾媵に通じ、之を激して変を生ず。其の罪専ら旰に在らざる者有り」云々と説く。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

なお、仇兆鰲『詳註』（卷十五）も輯註を引き、それを踏まえて、鈴木虎雄『杜少陵詩集』（卷十五）は「有是非」の字解に「各々曲直あり、崔旰が主將たる郭英父を殺したるは非なるも、事は郭が崔の妾媵に通じたるより起りしものゆゑ崔のみがあしとはいふべからず、又副元帥杜鴻漸成都に來任して崔が罪を正さず、崔竝に楊子琳・柏茂林に各々刺史防御の官を授く、是れ皆其事是非あるなり」という。

（注11）顧宸『註解』に「公、成都を辭して梓に至る、纔かに百里にして、是非其の眞伝を得ること莫し。亂離の景象、大率此の如し」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

《秦中》は、長安のこと。秦の故都である。これは直ちに上を承けて言う。叛乱のため道が塞がって、《驛使》は通ぜず、家郷をじつと思ひ続けても、その《消息》が得られないのである。《蜀道の兵戈》は、徐知道の乱を指す。《是非有り》とは、その情報が一樣でなく、《是非》が弁別しないのである。梓州は成都からわずか百里であるのに《是非》が眞を失するのは、亂離の景象である。

萬里ノ秋風吹ニ錦水ヲ 誰家ノ別淚溼ニ羅衣ヲ

萬里ノ秋風ハ言ニ天下皆秋ヲ。錦水ハ公ノ草堂所レ在。思其被ニ秋風ニ吹而孤寂可上レ悲也。淚溼ニスハ羅衣謂ニ婦人ヲ、以ニ禍亂遍ヲ蜀中ニ、傷多下カランヲ。離散之家泣ニ空閨ニ者上レ也。

《万里の秋風》は、天下いづこも秋なるを言う。《錦水》は、公の草堂があるところ。その《秋風》に《吹》かれてぼつねんともの悲しいのを思うのである。《淚羅衣を濕す》は、婦人のこと。禍乱が蜀全土に遍く広がっていることから、離散の家や空閨に泣く者が多いのを傷むのである。

莫愁コト劔閣終ニ堪レタルヲ據ニ 聞道松州已ニ被レト圍

※莫愁…コレバサテオキ 終…イツマデモ 已被圍…ヒトツノガレテマタフタツ

時ニ徐知道之亂已ニ平テテ吐蕃之禍復起。故ニ言莫慮コト劔閣之險終ニ堪レタルヲ據ニ。叛賊已ニ伏ス誅ニ、險不レ足レ恃ムニ耳。唯吐蕃馮陵、數々爲ニ蜀ノ患ヲ。今又聞道松州被レト圍、此誠ニ爲レ可レ憂、恐ハハ猖獗之勢、不レ知所ニ底止。不ハハ早ク爲ニ處置ヲ、將ニ致ニ滔天之禍也。顧註論スルコト之ヲ詳ナリ矣。諸註乃謂此指ニ崔旰、叛ヲ蜀ニ。崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注12）聞道松州已ニ被レト圍

（注13）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注14）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注15）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注16）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注17）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注18）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注19）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注20）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注21）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注22）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注23）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注24）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注25）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注26）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注27）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注28）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

（注29）崔叛ハ在ニ永泰元年ニ、松州陷二年ノ後也。且崔旰ハ未嘗據劔閣也。此詩黃草赤甲秦中蜀道錦水劔閣松州一篇中用ニ地名ヲ者七、不亦

甚^シ乎。且錦水羅衣、雖用^ニ借對^法、亦未^レ爲得^{タリト}也。^(注14)

(注12) この二字、東陽は「道ふを聞く」と訓するが、これで「聞道く」と読む。このこと、訳注稿(五)、204「別れを恨む」詩の(注28)参照。

(注13) 顧宸「註解」に「按ずるに此の詩、諸註俱に云ふ、崔旰蜀に叛くを指すと。崔旰が郭英父を殺すを考ふるに、永泰元年に在り。兩年の前、松州已に陥る。安んぞ「聞道く聞ま被」と云ふを得ん。且つ崔旰未だ嘗て劍閣に扼らざるなり。嚴武、吐蕃七万衆を破るの後、吐蕃又た松州を囲むと云ふに至つては、按ずるに史に未だ再び囲むの事有らず。黄鶴が曰く、是の時、公は梓潼の間に在り、応に「錦水」と言ふべからず。殆ど是れ兵戈に因つて成都を思ふ、故に云ふ(黄草峡西船帰らず、赤甲山下行人稀なり)と。亦た是れ山南の乱に因つて言ふ。公、夔州に在つて作るに非ざるなりと。良に是なり。良に是なり」とある。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

ちなみに、錢注も「鶴曰く、《秦中の駅使》は、李之芳の使ひを奉じて留めらるるを謂ふなり。《蜀道の兵戈》は、徐知道の劍閣に扼るを謂ふなり。当時、公、梓潼の間に在り。夔州の詩に非ざるなりと。按ずるに鶴説良に是なり」と黄鶴説に賛意を表する。

これに対して、輯註には(注10)に挙げた箇所に続けて「又た此の詩の首二語を按ずるに、乃ち夔州の作は疑ひ無し。黄鶴疑ふらく松州囲まれしは、広徳二年の事と。因つて秦中駅使を以て李之芳の吐蕃に使ひすると爲し、蜀道の兵戈を徐知道が劍閣に扼ると爲す。全解俱に謬れり。今、旧編を以て之を正す」と。これも宇都宮遯庵の増広本に引く。

(注14) 真仮対ともいう。訳注稿(三)、008「賈至舍人早に大明宮に朝するを奉和す」詩の(注27)参照。

当時、徐知道の乱はすでに平定されて吐蕃の禍が再び起つた。それゆえ《劍閣》の険は《終》^{いづまで}もこそこそと《扼る》^{とどめる}ことが《堪》^{こたへ}るに憂慮すると言う。叛賊はすでに誅に伏し、険は恃むに足らないのだ。ただ吐蕃がわがもの顔にのさばり暴威をふるい、しばしば蜀の患いとなった。今又た《松州》が《囲まれ》た《聞》く、これは誠に憂うべきことである。恐らく猖獗の勢は、とどまるところを知らない。早く処置しなければ、まさに天にはびこるほどの大きな禍

いを招くことになるだろう。顧註がこれを論じて詳らかである。諸註はかえつてこれは崔旰が蜀に叛いたのを指すという。崔旰が叛いたのは永泰元年(七六五)のことで、《松州》陥落の二年後である。それに崔旰はいまだかつて《劍閣》に《扼》らなかつたのである。この詩は、《黄草》《赤甲》《秦中》《蜀道》《錦水》《劍閣》《松州》と一篇の中に地名を用いるのが七つもあり、なんともひどいものではないか。それに《錦水》《羅衣》は、借對法を用いているものの、これまた適切なものとはみなせないのである。

090 白帝

此篇應^ニ是指^{ナル}崔旰之亂^一。^(注1) 亦取^テ起句^ノ二字^ヲ爲^レ題^也。

(注1) 邵宝「集註」(卷二十三、天文類)に「此れ亦た崔旰の叛くが爲にして作る」と。薛益「分類」(卷二、天文)も同じ。「集註」は、宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

この詩は、きつと崔旰の乱を指すのに違いない。やはり起句の二字を取つて題としたのである。

白帝城中雲出^レ門^ヲ 白帝城下雨傾^レ盆^ヲ

白帝山高^ク、故^ニ將^ニ雨^ヲ傾^ラ之^勢、雲從^ニ城門^一出、暴雨便驟^ニ沛然^{トシテ}如^ニ翻^レ盆^ヲ來^カ也。

(注2) 《傾》字、錢注(卷十四)および輯註(卷十三)は《翻》に作る。顧宸「註解」も同じ。

《白帝》山は高く、それゆえ今にも雨が落ちて来そうな勢いで、《雲》が城《門》より出ると、激しい《雨》がたちまち驟^{にわか}に沛然(ざあざあ)と降り《盆》をひっくり返したようである。

高江急峡雷霆闘[、] 古木長藤日月昏[、]

江爲^ニ峽^ノ所^レ束、水勢高^{シテ}且急、故^ニ波聲激烈[、]如^ニ雷霆之闘^一。山壑深邃、古木長藤、蒼鬱蔽^レ天[、]故^ニ使^ニ日月^ヲ蒙^ラ晦^一也。其地平常猶然、是日雲霾雨暴、江益^ク奔激、晝益^ク晦暝、使^ニ人^ヲ感^セ

亂離之象^(注5)、殊^(注5)不^(注5)可^(注5)堪也。長^(注5)一^(注5)作^(注5)蒼^(注5)、似^(注5)是^(注5)。

(注3) 〈古〉字、輯註は〈翠〉に作り、「一に古に作る」と。宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。

(注4) 邵宝『集註』に「雷霆闐ふとは、江、峽の為に束ねらる。故に波声激烈なり」と。薛益『分類』も同じ。『集註』は、宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。

(注5) 邵宝『集註』に「雲霾雨暴、故に江流奔激して、日月蒙晦なり。蓋し陰盛の極、乱離の象なり」と。薛益『分類』も同様。『集註』は、宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。

(注6) 錢注および輯註は〈蒼〉に作り、「一に長に作る」と注する。顧宸『註解』も〈蒼〉に作る。輯註は、宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。

〈江〉は〈峽〉にぎゅつとせばめられ、水勢は高くそのうえ急であるから、波声は激烈で、〈雷霆〉の〈闐ふ〉がごとくである。山壑は深邃で、〈古木〉や〈長藤〉が鬱蒼として天を蔽っているから、〈日月〉を暗くしているのである。その地はふだんでもなおそうであるのに、この日は〈雲〉が霾^(注9)るようにどんよりと垂れこめ〈雨〉がにわかには激しく降り、〈江〉はますます奔激し、昼はますます晦暝^(注9)にして、人に乱離の象を感じさせる、とりわけ堪えきれないのである。

〈長〉は、一に〈蒼〉に作る。その方がいいようだ。

去馬^(注12)不^(注12)如^(注12)歸馬^(注12)ノ逸^(注12) 千家今有^(注12)百家^(注12)ノ存^(注12)スル

※去^(注12)：ユク 逸^(注12)：ラク 存^(注12)：ノコル

自句對^(注7)ノ格。去^(注7)一^(注7)作^(注7)戎^(注7)。今從^(注7)輯註^(注7)正^(注7)ス之^(注7)。如猶^(注7)如意之如^(注7)。蓋馬^(注7)駄^(注7)物^(注7)而去^(注7)、勞苦^(注7)進^(注7)コト遲^(注7)。既^(注7)解^(注7)任^(注7)而歸^(注7)、暢然安逸^(注7)、蹄輕^(注7)而翩翩^(注7)也。此句因^(注7)勞^(注7)思^(注7)逸^(注7)、想^(注7)望^(注7)息^(注7)兵^(注7)休^(注7)ノ馬^(注7)也。下句憶^(注7)昔^(注7)傷^(注7)今^(注7)。兵戈之慘、人口凋耗、村落蕭索、良^(注7)可^(注7)酸鼻^(注7)也。

(注7) 自句対は、就句対、当句対のこと。訳注稿四、014「曲江酒に對す」詩の(注12)参照。

(注8) 東陽が底本とした邵寶『集解』、それに邵宝『集註』および薛益『分

類』、顧宸『註解』は、いずれも〈戎〉に作る。錢注および輯註も〈戎〉に作るが、「一に去に作る」と注する。輯註は、宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。

(注9) 邵寶『集解』に「如は、猶ほ如意の如のごとし」と。

(注10) 邵宝『集註』に「戎馬の句は、勞に因つて佚を思ふなり」と。宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。

(注11) 邵宝『集註』に「千家の句は、昔を憶ひ今を傷む」と。宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。

(注12) 『文選』卷十九、戦国楚の宋玉「高唐の賦」に「孤子寡婦、寒心酸鼻」とあり、その李善注に「酸鼻は、鼻辛酸にして涙出でんと欲するなり」と。

自句對ノ格。〈去〉は、一に〈戎〉に作る。今、輯註に従つてこれを正す。〈如〉は、如意の如とほぼ同じ。けだし〈馬〉は積み荷を載せるとなると、ゆつたりと安逸し、蹄軽く浮き立っている。この句は勞によつて〈逸〉を思い、兵を息め馬を休ませるのを想像し願望しているのである。下句は昔を憶ひ〈今〉を傷む。兵戈の慘状に、人口は凋耗し、村落は蕭索として、まことに酸鼻すべきである。

哀哀^(注12)寡婦^(注12)誅^(注12)求^(注12)盡^(注12) 慟^(注12)哭^(注12)スル 中原^(注12)何^(注12)レ^(注12)處^(注12)村

※哀哀寡婦^(注12)：アハレヤモメドモ 誅^(注12)求^(注12)：トリタテル

民死^(注12)于役^(注12)、故多^(注12)寡婦^(注12)。誅^(注12)責^(注12)也。誅^(注12)求^(注12)盡^(注12)クトハ者、軍需供億、民家陣亡之餘、猶徴^(注12)コト及^(注12)寡婦^(注12)、陵削^(注12)テ至^(注12)盡^(注12)ス也。中原^(注12)原中也。或作^(注12)秋原^(注12)、非^(注12)是。蓋婦人有^(注12)二野哭^(注12)者^(注12)、不^(注12)知^(注12)何^(注12)レ^(注12)處^(注12)流氓^(注12)也。即苦^(注12)誅^(注12)求^(注12)之寡婦、不^(注12)知^(注12)所^(注12)爲^(注12)而泣^(注12)也。其不^(注12)聊^(注12)生^(注12)至^(注12)此^(注12)、可^(注12)勝^(注12)慟^(注12)也哉。夫^(注12)亂世之民、財已^(注12)竭^(注12)而斂^(注12)不^(注12)休^(注12)、人已^(注12)窮^(注12)而賦愈^(注12)急^(注12)。苦莫^(注12)甚^(注12)レ^(注12)焉^(注12)。幸^(注12)生^(注12)泰平之世^(注12)者、不^(注12)可^(注12)レ^(注12)不^(注12)知^(注12)其恩^(注12)也。

(注12) 邵宝『集註』に「民役に死す、故に寡婦多し」と。薛益『分類』も同じ。『集註』は、宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。

(注13) 例えは、『広韻』に「誅、責なり」と。

(注14) 『漢書』卷五十六、董仲舒伝に「民は日に削られ月に腴して、寢く^{やすむ}以大いに窮す」と。腴は、縮む意。字音はセン。

(注15) 『詩経』小雅・小宛に「中原に救有り、庶民之を采る^と」とあり、毛伝に「中原は、原中なり」と。

(注16) 錢注および輯註は〈秋原〉に作る。顧註も同じ。

(注17) 107「闇夜」詩に「野哭千家戦伐を聞き、夷歌幾処か漁樵に起こる」とあり、詳解に「野哭は、嗟怨号泣、道路に盈ち、唯だ家裏のみならざるを言ふなり。(中略)孤兒寡婦家家哀悼す、号哭の声、慘として四野を震はすなり」と。なお、この語は、「礼記」檀弓上に「孔子野哭する者を惡む」と見える。

(注18) 邵傳『集解』に「猶ほ徴、寡婦に及び、野哭する有るに至る。民、生を聊せざるなり」と。

民は兵役に死し、それゆえ〈寡婦〉が多い。〈誅〉は、責である。〈誅求し尽く〉とは、軍需の供給が、民家陣亡ののちでも、徴すること〈寡婦〉にまで及び、どんどん搾り取って〈尽くすに至るのである。〈中原〉は、原中である。或いは〈秋原〉に作るのは、よくない。けれど婦人に野に哭する者がいたのだらう、いったいこの難民であるろうか。すなわち〈誅求〉に苦しむ〈寡婦〉は、なすすべを知らずに泣くのである。そのちゃんと生きていけないのがこれほどまじになったのは、何とも憐愍の情にたえないことだ。そもそも乱世の民は、家財がとつにすつからかんになっているのに取り立てはやまず、人がにっちもさつちもゆかなくなっているのに賦税はいよいよ急である。苦しみとしてこれよりひどいものはない。もつけないで泰平の世に生まれたわれらは、その恩恵を知らなければいけないのである。

091 吹笛

聞^レ人吹^テ笛^ヲ也。亦取^テ篇首ノ字^ヲ爲^ス題^ト。

人の〈笛を吹く〉のを聞くのである。やはり篇首の字を取って題とする。

吹^テ笛^ヲ秋山風月清^シ 誰^カ家^ノ巧^ク作^ス斷腸ノ聲^ヲ

※清…スミキル 巧…ジヤウズニ 斷腸声…カンニタヘザルメウオン
當^テ秋山寂寥、風清^{シテ}月朗^ク之夜^ニ、誰^カ家^ノ吹^テ笛^ヲ巧^ク弄^ス妙音^ヲ。
令^二人^ヲ不^レ勝^ニ勝^ニ感^ニ、殆^ニ欲^ニ斷^ニ腸^ヲ也。斷腸聲^ハ謂^フ哀切不^レ堪^レ聞^ニ。下皆由^二此三字^一生^ス。

(注1) 『唐詩寶珠』(卷五十八、器物一)に「秋山風清く月朗かなるの際に当たつて、誰が家ぞ巧みに此の断腸の声を作す、人をして愁思を喚起せしむ」と。〈誰家〉は、この二字で、誰の意。唐代の俗語。上文084「閨を遣る。戯れに路十九曹長に呈す」詩、089「黄草」に見える「誰家」も同じ。

〈秋山〉の寂寥として、〈風〉清く〈月〉朗かなる夜に、〈誰が家〉であろうか〈笛を吹く〉いて〈巧みに〉妙音を奏でるのは。人をして感にたえしめず、ほとんど腸を断たんとするのである。〈断腸の聲〉は、哀切にして聞くにたえないこと。以下はいずれもこの三字から生ずる。

風^ハ飄^{シテ}律呂^ニ相和^{シテ}切ナリ 月^ハ傍^ニ關山^ニ幾處^カ明^{ナル}

風月分頂。與^二春日春盤金華山北二首^一同格。樂音陽^ヲ爲^レ律、陰^ヲ

爲^レ呂。長笛賦^ニ律呂既^ニ和^シ、哀聲互^ニ降^{ルト}。此用^レ之^ヲ、謂^フ高下

清濁之音調^ノ也。切^ハ者清徹悽惋之意。所^ニ以^ニ動^ニ思^ヲ郷^ノ之^ノ情^ヲ也。

或^ハ爲^二切近之義^一、非^ニ是^ニ。笛中有^二關山月^一曲、述^レ傷^ニ離^ノ別^ノ。

此拆^二用^ス之^一。以^二征旅^一言、故^ニ曰^フ傍^ニ關山^一月^一。幾處^ハ多

少^ノ之^ノ辭。或^ハ言^フ多^ク或^ハ言^フ少^ク、此言^フ多^ク也。蓋處處^ハ旅人月下^ニ

聞^レ之^ヲ、皆愴^ニ離別之情^一。不^レ止^ク我一人^ノ之^ノ情^一也。胡燮亭云、

不^レ曰^フ照^ニ而^レ曰^フ傍^ニ、有^二丰神^一。益^ニ淒涼^一、與^二飄^ノ字^一俱^ニ妙^一。

(注2) 〈傍〉字、輯註(卷十四)は〈倚〉に作り、「他本は傍に作る」と注する。なお、錢注(卷十六)は〈傍〉に作り、「草堂は倚に作る」と。草堂は、蔡夢弼『草堂詩箋』のこと。

(注3) 沈德潜『杜詩偶評』に「風月分頂す」と。風月の二字をそれぞれ三四句の句頭(頂)に文字を分けて配置することをいう。

(注4) 顧宸『註解』に「次聯(風飄)〈月傍〉を以て分けて(風月)を承く。春日春盤金華山北二首と同格」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。訳注稿(七) 046「野望」詩の詳解に「起句の山水二字を以て分けて承く。立春吹笛の二詩と同格なり」と指摘するのを参照。

(注5) 薛益『分類』に「楽音陽を律と為し、陰を呂と為す」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注6) 『文選』卷十八、後漢の馬融「長笛の賦」。但し、〈互〉字を〈五〉に作る。

(注7) 例えば、『唐詩集註』(卷五)に「黄云ふ、笛声を摸写す。遠に似て実ハ切」というのは、切近(差し迫る)の意に解する。黄は黄道周のこと。訳注稿(九) 063「樓に登る」詩の(注15)参照。

(注8) 輯註に「樂府横吹曲に関山月有り。解題に関山月は離別を傷むなり」と。宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注9) 积大典『詩語解』卷上、幾の条に「字彙幾ハ問多少之辞」と。

(注10) ちなみに、邵宝『集註』(卷二十三、音楽類)および薛益『分類』(卷二、音楽)には「(幾処か明らかなる)とは、少なきを言ふなり」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本に、『集註』は詳説に引く。

(注11) 『唐詩貫珠』に「照と曰はずして傍と曰ふ、丰神有り。益ます凄凉、飄字と俱に妙」と。丰神は、風采。

〈風月〉の二字を分けて句頭に冠する。「春日春盤」「金華山北」の二首と同格。楽音は陽を律とし、陰を呂とする。「長笛の賦」に「律呂既に和し、哀声互いに降る」と。ここではこれを用い、高下清濁の音調をいうのである。〈切〉とは、清徹悽惋の意。故郷を思う感情を動かすゆえんである。或いは切近の意とするのは、よくない。笛中に「関山月」の曲があり、離別を傷むことを述べる。ここではこれを分けて用いる。征旅をもつて言うので、それゆえ〈傍〉といい、〈幾処〉という。〈幾〉は、多少を問う辞。多いことを言ったり少ないことを言ったりするが、ここは多いのを言うのである。けだし至るところで旅人が月下にこれを聞き、みな離別の情を傷ましめてい

るだろう。ただ自分ひとりにとどまらないのである。胡燮亭が云う、「照といわずに傍というのは、丰神がある。ますます凄凉として、〈飄〉字と俱に妙」と。

胡騎中宵堪北走^三 武陵一曲想南征^一

※想：ミルヤウナ

胡騎堪走^二極言悽切ナルヲ。賈氏説林^(注12)李陵爲三單于ノ所圍、夜半

使郭超^{注13}吹笛^マ、聲多ク悲慘、敵人皆流涕^マ、解圍^マ北走^ス。周

弘讓^{注14}笛^マ詩^マ胡騎爭北歸^ル、偏^ニ知別離ノ苦^マ。公之用本^レ此^ニ。諸

解引^マ晉^マ劉琨^マ吹笛^マ退^マ胡騎^マ、爲^ニ借^ニ以^ニ比^ニ此^ニ笛^ニ、非也。武陵一

曲^マ、蓋笛中ノ實事也。後漢^マ馬援^マ南征^マ交趾^マ。門生袁寄生善^マ吹

笛^マ、援作歌^マ以和^マ之^マ、名^ニ武溪深^ト。其詞^ニ曰^ク、滔滔^マ武溪一

何^ニ深^キ、鳥飛^マ不^レ度^マ、獸不^レ能^レ臨^マ。嗟哉^マ武溪兮多^ク毒淫^マ。一聯言

若使^マ胡騎^マ聞^マ之^マ、亦應^ニ思^ニ歸^ニ而^ニ北走^ス。又^マ聞^マ武陵之曲^マ、

想^マ見^マ南征之苦^マ、皆斷腸之意也。時^ニ蕃戎憑^マ陵^マ、故^ニ有^ニ此^ニ聯^一。

借^マ以^ニ寓^マ意^マ。非^ニ特^ニ以^ニ桓伊^マ善^マ弄^マ弄^マ已^ニ上^ニ也^一。

(注12) 『唐詩貫珠』に「賈氏説林に李陵、單于の爲に囲まる、夜半郭超をして

笛を吹かしむ、声多く悲慘、敵人皆涕を流し、囲みを解きて北走す。少

陵の用ふる、此に本づく」と。『賈氏説林』は、『説郭』(第三十一所収。

但し、〈敵人〉を〈胡人〉に作る。

(注13) 顧宸『註解』に「初學記に陳の周弘讓長笛清氣を吐く詩に云ふ、胡騎

争つて北に帰り、偏へに知る郷を別れるの苦と。六朝陳・周弘讓の「長

笛清氣を吐く詩を賦し得たり」(『初學記』卷十六)の第五、六句。

(注14) 薛益『分類』に「(胡騎北に走る)とは、晋の劉琨、字は越石、晋陽に

在つて、胡騎の爲に囲まる。琨乃ち月に乗じ樓に登つて清嘯す。賊之を

聞き、皆悽然として長歎す。中夜にして胡笛を奏す、賊又た流涕歎歎し、

土を懷ふの思ひ有り。遂に囲みを棄てて去る」と。宇都宮遯庵の両著に

も挙げる。なお、劉琨の伝は、『晋書』卷六十二に見え、興膳宏編『六朝

詩人傳』に訳注がある(湯淺陽子執筆)。

ちなみに、『唐詩貫珠』に(注12)に挙げた箇所に続けて「乃ち虞註に劉琨笛を吹き胡騎を退く事を引くは、笛笛各おの異なり、頗る詩神を

損なふ」と。虞註は、元の虞集（字は伯生、一二七二—一三四八）に仮託した『杜律虞注』（「杜工部七言律詩」）のこと。

〔注15〕 沈德潜『杜詩偶評』に見える。

〔注16〕 薛益『分類』に「（樂府）解題に云ふ、馬援南征して作る所。門生袁寄生善く笛を吹く。援歌を作り之に和す。武溪深曲と名づく。曰く、滔滔たる武溪に何ぞ深き、鳥飛んで度らず獸敢へて臨まず。嗟哉武溪毒淫多し」と。宇都宮遼庵の増広本にも引く。但し、ここに挙げる歌詞は、『唐詩集註』に引く崔豹『古今注』に拠るものである。

〔注17〕 『唐詩貫珠』に「胡騎をして之を聞かしむれば、亦た塞上の帰るを思ひて北走するが如し。武陵の曲の若きは、更に南征の苦を想見せん。当日自然に帰るを思はん矣」と。

〔注18〕 薛益『分類』に「（南征）を想ふとは、此の笛声に因つて桓伊が善く弄することを想ふなり」というのに対し、『唐詩集註』に引く蔣一葵の説に「五六は其の声能く断腸するを見はす。然れども（北走（南征）は借りて以て意を寓す。特に桓伊が善く弄するを以てする已に非らざるなり」と。

桓伊が笛を善くしたことについては、『世説新語』卷二十三、任誕篇に「桓子野（伊）善く笛を吹く」と。

〔胡騎〕の（走）るに（堪）うは、極めて懐切なるを言う。『賈氏說林』に「李陵が単于に囲まれ、夜半郭超に笛を吹かせた。声多く悲慘、敵人は皆涕を流し、包圍を解いて北走した」と。周弘讓「笛の詩」に「胡騎争つて北に帰り、偏へに知る別離の苦」と。公が用いるのはこれに本づく。諸解に晋の劉琨が笛を吹いて胡騎を退けた話を引き、借りて笛に比したとするのは、よくない。〔武陵一曲〕は、けだし笛中の実事である。後漢の馬援が交趾に南征した。門生の袁寄生は善く笛を吹き、馬援は歌を作つてこれに和し、「武溪深」と名づけた。その詞に曰く、「滔滔たる武溪に何ぞ深き、鳥飛んで度らず獸臨むこと能はず。嗟哉武溪兮毒淫多し」と。この一聯は、もし〔胡騎〕にこれを聞かせたなら、やはりきつと故郷に帰らんことを思つて（北走）するに違いない。更に〔武陵〕の曲を聞き、南征の

労苦を想見するだろう、と言う。いずれも〔断腸〕の意である。時に蕃戎がわがもの顔にのさばり暴威をふるい、それゆえこの聯がある。借りて以て意を寓している。特に桓伊が善く吹いたことからいうだけではないのである。

故園／楊柳今搖落^{スラン}

何^ソ得^{タル}愁中卻盡^ク生^{スル}コトヲ

※却^レゾングワイニ

折楊柳亦笛曲ノ名。述^ニ送別^ヲ之恨^ヲ。此借^ニ曲名^ヲ、翻^{シテ}折^レ爲^レ生^スト、寫^ス想^見ル故園^ノ之感^ヲ、亦見^ニ吹者之技精^ヲ。統^ニ與^ニ起處^ヲ巧^クノ字映帶。蓋初奏^シ關山月^ヲ、次^ニ武溪深^ヲ、至此^ニ奏^ス折楊柳^ヲ。故^ニ感嘆^{シテ}而言^フ。時已^ニ深秋^ニ、故園／楊柳ハ應^ニ盡^ク搖落^ス。而今夜笛中還^テ吹^ク出楊柳^ヲ來^ル、愴然感傷之至、宛見^ニ故園ノ柳色依依^{トシテ}如^レ在^ニ目前^ニ。抑^ク當^ニ此搖落之時^ニ、是物何^ニ由^テ而頓^ニ生^{スル}邪^カ。吹笛之切^{ナル}、巧^ニ作^ニ斯聲^ヲ、令^ニ下人^ヲ因^ニ聞^ニ其曲^ヲ、如^レ上^ニ見^ニ其物^ヲ焉。於是^ニ鄉思切^ニ迫^リ、益^ク不堪^ニ斷腸^ニ也。愁中盡^ク生^ス見^ニ笛聲飄風^ヲ遠度^リ、愁思隨^ニ滿^ニ望^ニ中^ニ、故與^ニ中二聯^ニ斤兩相稱^ヲ也。李春甫云、大手筆聲律極^ニ細^ニ、然^モ有^ニ對^{シテ}意^ヲ不^レ對^{シテ}詞^ヲ、對^{シテ}詞^ヲ不^レ對^{シテ}意^ヲ者。蓋此詩二聯、學者不^レ可^ニ效^シ、故特^ニ言^フ之^ヲ也。

〔注19〕 『詩經』小雅 采薇に「昔我往^ニ之^ニ、楊柳依依^{トシテ}たり。今我來^ニ之^ニ、雨雪^ニ霏^ニ霏^{トシテ}たり」とあり、依依は、しなやかなさまをいう。

〔注20〕 『唐詩訓解』に「故園の楊柳方に已に搖落す。今何に由つて頓に生ずるや」と。

〔注21〕 詠注稿（一）、「杜文貞公伝」の（注102）参照。

〔注22〕 李春甫は、伝不詳。この評語は『唐詩訓解』に挙げ、度会末茂「杜詩評義」にもこれを引く。なお、『唐詩集註』には明・譚元春（字は友夏、一五八七—一六三七）の評語として挙げ、仇兆鰲の詳註（卷十七）には蔣一梅のそれとして引く。大手筆は、優れた名うての大詩人をいう。

〔注23〕 詠注稿（三）、012「曲江二首」其一の詳解に「学ぶ者好んで此に放はば、則ち隣女の效顰なり矣」とあり、その（注16）参照。

「折楊柳」も笛曲の名。別れを送る恨みを述べる。これは曲名を借りて、折字を翻して〈生〉となし、〈故園〉を想い見るの感を写し、やはり吹く者の技が精巧であるのをあらわしている。統べて起処の〈巧〉字と互いに反映している。けだし初めに「関山月」を奏で、次に「武溪深」を、ここで「折楊柳」を奏でる。それゆえ感嘆して言う。時すでに〈秋〉深く、〈故園の楊柳〉はきつとすっかり〈揺落〉したに違いない。それなのに今夜笛中にかえって〈楊柳〉の曲を吹いて来るのには、愴然として感傷が極まり、あたかも〈故園〉の柳色がなよなよと撓^{しな}って目前にあるかのように見える。そもそもこの〈揺落〉の時にあたって、この物がどういいうわけで頓に〈生〉ずるのか。〈笛を吹く〉の〈切〉なること、〈巧〉にかかる〈声〉を〈作〉し、人にその曲を聞くことで、その物を見るような心地にさせた。そこで望郷の思いがひしひしと胸に迫り、ますます〈斷腸〉の思いにたえられないのである。〈愁中^{しゅうちゅう}尽く生ず^{なまか}〉は、笛声^{ふえこゑ}が風に飄^{ひら}って遠く渡り、愁わしい思いがそれに随^{まな}って望中^{まなか}に満つるのをあらわす。それゆえ中二聯と均衡がとれるのである。李春甫が云う、「名手の声律は極めて細やかであるが、されど意味を対偶にして言葉を対偶にせず、詞を対偶にして意味を対偶にしないものがある」と。けだし、この詩の二聯について、学ぶ者は響^{ひびき}に倣^{なま}うようなみつともないまねをしてはいけない。それゆえ特にこれを言うのである。

092 夜

公寓^ス夔^ス之西閣^ニ臥^レ病^ニ、未能^ニ北^ニ歸^{コト}。秋夜感懷^ニ、因^チ有^ニ此作^一。一本^ニ作^ニ秋夜客舍^ニ。

(注1) 錢注(卷十五) および輯註(卷十三)に題下に注して「一に秋夜客舍」と云ふ」と。輯註は宇都宮遷庵の増広本に挙げる。

公は夔州の西閣に寓して病に臥せり、いまだ北に帰ることができない。秋夜懷いに感じて、それでこの作がある。一本に「秋夜客舍」

に作る。

露下^ニ天高^ニ秋水清^シ 空山獨夜旅魂驚^ッ

天高^ハ言^ニ秋氣清迥^{ナルヲ}。楚辭^ニ悲哉秋之爲氣也。沈寥^ニ兮天高^{シテ}

而氣清、寂寥^{トシテ}兮收^レ潦^ヲ而水清^{シト}。旅魂驚^ハ言^ニ客況不^レ安^ニ於

寢^ニ。王粲七哀^ニ獨夜不^レ成^レ寐^ヲ。此點^ニ化^ス之^ヲ。

(注2) 錢注は「水」字を「氣」に作る。

(注3) 宋玉「九弁」「楚辭」卷八、「文選」卷三十三。

(注4) 邵宝「集註」(卷二十三、時序類) および薛益「分類」(卷二、晝夜)

に「旅魂驚くとは客況寢に安んぜざるを言ふなり」と。「分類」は、宇都宮遷庵の増広本にも挙げる。

(注5) 「文選」卷二十三、三国魏の王粲「七哀」詩二首其二。但し、〈成を能〉に作る。

(注6) 点化については、訳注稿(八)、057「将に成都の草堂に赴かんとして途中作有り、先づ嚴鄭公に寄す五首」其一の(注12)参照。

「天高し」は、秋氣がはるか澄み切っているのを言う。「楚辭」に「悲しい哉秋の氣爲るや。沈寥として天高くして氣清み、寂寥として潦を収めて水清し」と。「旅魂驚く」は、旅寢の身でおちおち眠れないことを言う。王粲の「七哀」に「獨夜寐を成さず」と。これを点化している。

疎燈自照^{シテ}孤帆宿^シ 新月猶懸^{リテ}雙杵鳴^ル

※疎燈^ニサビシキヒカゲ 新月^ニヨヒツキ

上ノ句俯臨^ニ、應^ニ秋水^ニ言^フ。下ノ句仰望^ニ、應^ニ空山^ニ言^フ。此自閣所^ニ見聞^{スルヲ}、夜景^ニ而皆觸^ニ動^ス旅況之感^ヲ者。疎燈自照^ス、與^ニ暗飛

螢自照^ス同、言^ニ照不^レ及^ニ外^ニ。蓋江畔有^ニ夜泊^ニ孤舟^ニ。燈火映^ニ帆檣^ニ、寒影寂寥^{タルヲ}也。新月猶懸^ハ謂^ニ夜深^ヲ。蓋七八日之月。杵音

渚。雙杵、兩人夾^ニ碇^ニ對^シ擣^ス者。此言^ニ碇杵之聲與^ニ月俱^ニ懸^{ルヲ}。蓋

山城^ノ碇聲、仰而望^ニ之^ヲ、新月銜^ニ城^ニ、聲在^ニ其處^ニ也。寫得^ニ刻畫^ニ。蓋

范杼云、善^ニ詩^ニ者就^ニ景中^ニ寫^ニ意^ヲ、不^レ於^ニ意中^ニ尋^ニ景^ヲ。如^ニ杜

詩^ノ無邊^ノ落木蕭蕭^{トシテ}下^リ、疎燈自照^{シテ}孤帆宿^シ、殊方落日玄猿

哭^う諸聯^{しよれん}、即景物之中含^{ちゆう}蓄^{しよく}多少愁恨^{しゆうこん}意^い。若說出^{せきしゅつ}便短淺^{びんたんせん}矣^や。

(注7) 邵宝『集註』および薛益『分類』に「孤帆は秋水に應じて言ひ、双杵は空山に應じて言ふ」と。『分類』は宇都宮遯庵の増広本に、『集註』は詳説に引く。

(注8) 『倦夜』詩(詳註卷十四)の第五句。

(注9) この言い方、『唐詩貫珠』(巻五十、秋)に「蓋し杵声は山上に発し、以て舟中に之を聴く。高く懸かるが若きに似たり。写し得て刻画」と見える。刻画は、克明に描くこと。ちなみに胡以梅は、この詩を「舟に居るの作」とし、「舟中に寐ねられず、故に岸に上がつて室に入り、長櫓を歩して消遣」したものとみなしている。

(注10) 元・范曄(字は德機、一二七二—一三三〇)のこと。東陽が「杵」とするのは、杵の訛字。仇兆鰲の『詳註』(巻十七)に、

范德機曰く、詩を善くする者は、景中に就きて意を写す。詩を善くせざる者は、意中を去つて景を尋ぬ。杜詩の「無端の落木蕭蕭として下り、不尽の長江滾滾として来る」(疎燈自ら照して孤帆宿し、新月猶は懸りて双杵鳴る)「殊方日落ち玄猿哭し、故園霜前白鴈来る」の如きは、即ち景物の中に多少の愁恨の意思を含蓄す。並に愁恨の字眼を言ふを消ひず、但だ愁中の景を写す、便ち自ら愁恨の意有り。若し愁恨の二字を説き出せば、便ち意思短淺、此の説何如。

云々と見える。(並)は、否定を強調する副詞。決しての意。(無端の落木)云々は、116「九日二首」其二の頷聯。「殊方日落ち」云々は、115「九日二首」其一の頷聯。なお、ここに示した箇所は、近人張健編著「元代詩法校考」(北京大学出版社、二〇〇一年)によれば、范德機「説詩要旨」の「総論」に見えるもので、明・熊達「清江詩法」巻三にこれを引く。

上の句は俯して臨む。(秋水)に應じて言う。下の句は仰いで望む。(空山)に應じて言う。これは閣より見えたり聞こえてきたりした夜景で、いずれも旅況の感慨を触発し動かすもの。(疎燈自ら照す)は、「暗飛螢自ら照す」と同じく、照らすことが外に及ばないのを言う。けだし江畔に夜泊の孤舟があり、燈火が帆檣に映じて、寒々した影が寂寥としているのである。(新月猶は懸る)は、夜深きこと。

けだし七八日の月であるう。(杵)、字音は渚。(双杵)は、二人が砧を挟んで向き合つて擣くこと。これは砧杵の音が「月」とともに「懸る」の言う。けだし山城の砧声。仰いでこれを望めば、(新月)が城を包みこみ、声はそこにあるのである。描き方が克明だ。范曄「杵」が云う、「詩を善くする者は景中に就いて意を写し、意中に景を求めない。杜詩の(無辺の落木蕭蕭として下る)」、「疎燈自照して孤帆宿す」、「殊方落日玄猿哭す」の諸聯のごときは、とりもなおさず景物の中に多くの愁恨の意を含蓄している。もし(愁恨の二字を)説き出せば、たちまち底の浅いものになってしまう」と。

南菊再逢^{タビヒ}人臥^レ病^レ 北書不^レ至^レ雁無^レ情

※無情…ツレナシ

南菊ハ謂^ハ南地ノ菊花ヲ。菊逢^レ人ニ妙ナリ。倒轉^{セハ}則庸^{ナリ}矣^(注11)。蓋菊花似^レ獻^ス媚^ヲ而人仍舊^ニ伏^ニ枕^ニ。應^ニ爲^ニ花恨^{ラル}耳。以^ニ無情^一爲^ニ有情^一。反^ニ襯^{シテ}下句^ニ弄^ス巧^ヲ。妙在^ニ言外^ニ矣。北書ハ謂^ニ故郷ノ音信^一。秋雁自^ニ北地^一來^ニ、故^ニ觸^ニ感思^ニ郷書^一。無^ニ情言^ニ等閑^一飛過^ル也。公以大曆元年春^ニ至^ニ夔^ニ、明年仍滯留^ニ、再^{タビヒ}見^ニ秋菊之開^ニ、艤^{シテ}舟^ニ欲^{シテ}出^ニ峽^一、而臥病^ニ未^レ果^ス。感^{シテ}雁^ニ望^ニ郷書之至^一、而亦莫^レ得^ニ一行^一。夫^レ家信不^レ到^ニ、與^ニ雁何^ソ干^{ラン}。但因^レ無^ニ路^一可^レ通^ス、歸^ニ怨^ニ于雁^一、出^ニ於無聊之極思^ニ也。

(注11) 『唐詩歸』卷二十二、盛唐十七にこの詩を載せ、明・鍾惺(字は伯敬、一五七四—一六二五)の評に「(菊人に逢ふ)妙なり。倒転せば則ち庸なり矣」と。

(注12) 邵宝『集註』および薛益『分類』に「北書は故郷の音信なり」と。『分類』は、宇都宮遯庵の増広本にも挙げる。

(注13) ちなみに、釈大典「詩語解」巻上に「等閑徒也。不^レ用^ニ心^一也」と。訳注稿(六)、031「野老」詩の(注12)も参照。

(注14) 顧宸「註解」に「公、大暦元年の春を以て夔州に至り、秋、夔の西園に寓す。明年秋、東屯に遷る。仍は夔に在るなり。夔州を南楚と爲す。夔に在ること凡そ兩秋、故に云ふ南菊再び逢ふと。時に舟を艤して峽を

出んと欲す、而れども病に臥して未だ能はず。但だ北書の至るを望む耳」と。宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。

(注15) 『唐詩貫珠』に「家信の通ぜざる、鴈と何ぞ干らん。独り(鴈情無し)と云ふ者は、蓋し骨肉の音書、豈に肯へて伝はらざらんや。止だ路の通ず可き無きに因つて、所以に怨を鴈に帰す、骨肉に關するに非ず。此れ亦た無聊の極思に出づるなり」と。

〔南菊〕は、南地の菊花のこと。〔菊〕が〔人〕に〔逢〕うは、妙。転倒すれば凡庸になってしまう。けれど菊花は娟を献ずるがごとくして〔人〕は相変わらず枕に伏したままにいる。きつと花に恨まれるにちがいない。無情のものを情あるものとみなし、下句に際立させて技巧を弄しており、妙は言外にある。〔北書〕は、故郷の音信のこと。秋の〔雁〕は北地より来る、それゆえ郷書への思いを触発し心感じさせる。〔情無し〕は、全く氣にとめずに飛び過ぎるのを言うのである。公は大暦元年(七六六)春に夔州に至り、明くる年もやはり滞留したまま、再び秋菊の開くを見、舟を驪して峽を出でんとして、〔病に臥し〕ていまだ果さずにいた。〔雁〕に心感じて郷書の至るを望んでも、やはり一行すら得ることがなかった。そもそも家信が届かないのは、〔雁〕とどうして関わりがあるうか。ただ路の通すべきなきに因つて、怨を〔雁〕に帰しているのは、遣る瀬なきの極まった思いから出るのである。

歩檐倚杖看牛斗 銀漢遙應接鳳城

※歩檐倚杖：マワリエンヲヨボくトアルキツ、

歩檐ハ歩廊也。舊作ニ步欄ニ、見ニ楚辭「大招、司馬相如賦ニ。欄ハ古ノ檐字。顧註ニ步檐即今之飛檐。古者六尺曰步。今之廊檐大率廣六尺、故曰ニ步檐。牛斗ハ玄武七宿中ノ二宿。看ハ牛斗ヲ候ニ時刻也。鳳城ハ指ニ長安ヲ、因ニ建章宮銅鳳ノ故事ニ、號ニ爲ニ鳳皇城ト。或ハ引ニ弄玉ノ事ヲ、非也。蓋中夜夢驚、終ニ不能寐。故ニ起出閣ヲ、扶病倚杖ニ、徘徊歩廊ニ、聊以遣遣。乃候時ヲ

望ニ星斗ヲ、因ニ感シテ銀河ノ亘テ天ニ而低ニ、想ニ其應與ニ京城連接ニ、依依戀々闕望。亦至情之切ナル、作ニ斯癡想也。應ノ字思レ京ノ之精神、尤難レ爲レ懷。邵註以ニ七夕ノ事ヲ附會ス。殊ニ不ニ交涉。引ニ小杜詩ヲ、尤謬。俗本ニ步檐作ニ步蟾ニ、誤甚。丹鉛錄ニ辨之。鍾伯敬云、同一清壯ニシテ而節細ニ味永。案レ之ヲ有レ物覺ニ老去悲秋昆明池水等ノ作皆遜レ之。

(注16) 『文選』卷八、前漢の司馬相如「上林の賦」に「步欄周流」とあり、その李善注に「步欄は步廊なり」と。欄は檐と同じ。

(注17) 顧宸「註解」に「楚詞に曰く、曲屋步欄と。漢の相如の賦に步檐周流と。即ち今の飛檐步廊なり。古は六尺を歩と曰ふ。今の廊檐大率広さ六尺」と。宇都宮逕庵の両著にも挙げる。『楚辭』は卷十の「大招」。

(注18) 玄武七宿は、中国の星座で二十八宿あるうち北方にある七宿(斗・牛・女・虚・危・室・壁)。

(注19) 建章宮は漢代の宮殿の名。その宮門の北に円闕があり、その上に武帝によって銅製の鳳凰が造られたという。『文選』卷一、後漢の班固「西都の賦」に「建章に棍じうして外に連なりて属き、壁門の鳳闕を設け、上は觚稜して金爵を棲ましむ」とあり、その李善注に「三輔故事に曰く、建章の宮闕の上に銅鳳凰有り」と。然らば金爵は則ち銅鳳なり」と。また同じく卷四十六、南朝宋の顔延之「三月三日曲水詩の序」に「方且に鳳闕を排いて以て高く遊び、爵園を開いて広く宴せんとす」とあり、李善注に引く潘岳の「閼中記」に「建章の円闕は北道に臨み、銅鳳、上に在り。故に鳳闕と号す」と。

(注20) 輯註に趙次公の説を引いて「秦の穆公の女、簫を吹く。鳳其の城に降る。因つて丹鳳城と号す。其の後、京師の城を言ひて鳳城と爲す」と。宇都宮逕庵の増広本にも挙げる。弄玉は女の名。

ちなみに、〔鳳凰城〕の語、初唐の盧照鄰「首春京邑の文士に贈る」詩(『全唐詩』卷四二)に「寒は辞す楊柳の陌、春は満つ鳳凰城」、盛唐の王維「恭懿太子挽歌五首」其五(同上卷二二六)に「山は朝す予章館、樹は転ず鳳凰城」、岑参「感遇」二首其一(同上卷一九九)に「鳳凰城頭日斜めならんと欲し、門前の高樹春鳩鳴く」などと見えるが、それらの近人の注釈、祝尚書『盧照鄰集箋注』(上海古籍出版社、一九九四年)、

楊文生『王維詩集箋注』（四川人民出版社、二〇〇三年）、廖立『岑嘉州詩箋注』（中華書局、二〇〇四年）は、いずれも弄玉の故事を挙げる。これは仇兆鰲『詳註』が趙次公の説を挙げるのに拠ったもの。なお、用例は省略するが、『鳳城』の場合も同様。

〔注21〕『礼記』問喪篇に「身病み体羸る、杖を以て病を扶くるなり」と。

〔注22〕ちなみに、『恋闕』の語が詩に用いられた例として、杜詩以前には、初唐の崔湜「桃林塞に至る作」（『全唐詩』巻五十四）に「丹心恒に闕を恋ひ、白首更に親を辞す」と見えるのみであるが、杜甫には、

・闕を恋ひて丹心披き 衣を霑して皓首啼く

（『愁を散ず』詩二首其二、詳註巻九）

・婦老故林を守り、闕を恋ひて悄として頸を延ぶ

（『八哀詩』其八、詳註巻十六）

・舟を泊す楚宮の岸、闕を恋ひて浩として辛酸なり

（『敬んで族弟唐十八使君に寄す』詩、詳註巻二十一）

・恋闕肺肝を勞し、掄材杞桷に愧づ

（『楼上』詩、詳註巻二十二）

といった例があり、唐代の詩人のなかでもっとも多い。

〔注23〕邵傳『集解』に「此の時此の夜、仰いで牛女二星を瞻るに、天河に逼近す。乃ち鵲橋の濟渡有り。我が帰期阻却して但だ天河の長くして応に長安と相接すべきを見るのみ。情、闕を恋ふるが如きは何ぞや。杜牧が詩に云ふ、臥しては見る牽牛織女の星と。此に胚胎す」と。杜牧の詩は、『秋夕』（『樊川外集』）と題する七絶の結句。但し、これは王建の集にも「宮詞」として見え、王建の作とするのがよい。

なお、釈大典『杜律發揮』に、「牛斗」は牽牛・南斗で楚蜀の分野に当たるとし、この星を望んでそれに連なる銀漢に及ぶと説いた後、「以七夕事附會。不交渉。杜牧宮詞亦非其類」と指摘する。

〔注24〕顧宸『註解』に（注17）に挙げた箇所が続けて「俗本に步蟾に作る、非なり」と。邵宝『集註』および薛益『分類』は「蟾」に作る。なお、錢注は「蟾」に作り、「一に簪に作る」と注し、また「趙叟曰く、当に歩簪を以て正と為すべし」という。輯註は「簪」に作り、「旧、蟾に作る。趙定めて簪に作る」と注する。趙叟は、宋の趙次公（名は彦材）のこと。

〔注25〕明・楊慎『丹鉛總錄』巻十八、杜甫步蟾字の条に、次のようにいう。

杜子美が詩に「歩蟾杖に倚つて牛斗を見る」と。蟾は古の簪の字。楚辭大招に「曲屋步欄」と。注に曲屋は周閣なり。步欄は長砌なり。司馬相如が賦に「步欄周流、長途中宿」と。欄は亦た古の簪の字なり。又た梁・陸倕が鍾山寺の詩に「歩簪時中に宿し、飛階或いは上征す」。沈氏滿願の詩に「歩簪新月に随ひ、燈を挑げて落花を惜しむ」と。杜公蓋し其の字を襲用す。後人知らず、妄りに改めて歩蟾に作る。且つ前聯に新月の字有り、而して結句に又た歩蟾と云はば複せり矣。況んや歩蟾は乃ち學子坊牌の字、杜公の時寧くんぞ此の悪字有らんや。甚しいかな士俗医すべからざること。

陸倕は、六朝梁の人。その「昭明太子が鍾山の解講に和す」詩（『古詩紀』巻九〇）。沈滿願も、同じく梁の人。但し「歩簪新月に随ひ」云々の句は、その詩に見当たらない。坊牌は、忠孝貞節の行いなどを顕彰するのに造った建築物。なお、この『丹鉛總錄』は、『杜詩評叢』に引くが、

「梁」字を脱し、「乃」字を「及」に誤る。

〔注26〕『唐詩歸』に「同一清壯にして節細かに味永し。之を按ずるに物有り、《老去悲秋》《昆明池水》等の作、皆之に遜るを覚ゆ」と見え、『杜詩評叢』にも引く。《老去悲秋》は021「九日藍田崔氏の莊」、《昆明池水》は099「秋興八首」其七に見える語。節は音律。物は（具体的）内容、実質の意。

《步蟾》は、歩廊である。旧に《步欄》に作り、『楚辭』大招や司馬相如の賦に見える。《欄》は古の《簪》字。顧註に「歩蟾はとりもなおさず今の飛蟾。古は六尺を歩という。今の廊蟾はおおむね広さ六尺、それゆえ歩蟾という」と。《牛斗》は、玄武七宿中の二宿。《牛斗を見る》は、時刻を候うのである。《鳳城》は、長安を指す。建章宮銅鳳の故事にちなんで、号して鳳皇城となす。或いは弄玉の故事を引くのは、よくない。けだし真夜中にはと夢が覚め、そのままだ寝つかれなかった。それゆえ起きて闇を出、病の身をおして《杖に倚り、歩廊を徘徊して、とりあえずは気晴らしをする。そして時刻を候うのに星斗を望み、そこで銀河が天に横たわって低く垂れているのに心感じて、それが京城とつながっているはずだと想うと、

心吸い寄せられ宮闕を慕って瞻望する。やはり切なる至情のゆえに、かかるたわけた想像をなしたのである。〈応〉字は、京を思う気持ちだが、とりわけ懷をなし難く居たたまれない。邵註は七夕の故事を以てこじつけるが、ちっとも関係しない。小杜（杜牧）の詩を引くのはとりわけ謬まりだ。俗本に〈歩檐〉を〈歩蟾〉に作るのは、誤まりも甚しい。『丹鉛錄』にその違いを論じている。鍾伯敬が云う、「同一の清壮にして節細かに味永し。これを案ずるに物有り、〈老去悲秋〉〈昆明池水〉等の作、皆これに遜るを覚ゆ」と。

杜律詳解卷之中

(二〇〇九・九・二三初稿)

(二〇一〇・二・七補筆)

にのみや・としひろ／文化情報学部教授
E-mail: ninomiya@sugiyama-u.ac.jp